

呉文鎔の遺産－曾国藩と胡林翼

浅 沼 かおり

はじめに

第1節 岳州と靖港の敗北

第2節 胡林翼と陶澍

第3節 胡林翼の貴州時代

第4節 曾国藩と胡林翼

おわりに

はじめに

以前、拙稿^{*1}で、湖広総督・呉文鎔の非業の死について述べた。『清史稿』が伝えるように、太平軍との戦いのなか、呉文鎔は「胡林翼に黔勇〔貴州省の郷勇〕を率いて来させて会剿〔合流して討伐する〕しようとし、また曾国藩の水師と夾攻することを約し、両軍の到着を待って大挙滅賊するつもりであった」が、湖北巡撫・崇綸に迫られて、両軍を待たずに黄州に進撃し、堵城で敗れ、咸豊4年1月に自尽した^{*2}。

呉文鎔は、曾国藩が会試に合格したときの総裁官の一人^{*3}であったので、曾国藩の師にあたる。呉文鎔は咸豊3年12月に、曾国藩に次のような手紙を遺したという。「私は堅守して君を待って東下するつもりであった。それが正しいことだ。いま、人に逼られ、一死を以て国に報いる、それだけが望みだ。君の訓練した水軍と陸軍は、必ず、自信ができてから出陣して敵に対しなければならない。私のために軽率に東下してはならない。東南の大局は君一人が恃みであるから、慎重を心がけなければならない。おそらく今後続く者はいない。私と君の立場は固より異なる」^{*4}。呉文鎔は自分のために忽卒に出陣してはならないと戒め、曾国藩とその軍を保全したのである。

呉文鎔は、胡林翼の父と会試の「同年」の間柄であった。また、胡林翼は雲貴総督だった呉文鎔のもと、貴州省で知府を務めたこともある。呉文鎔の奏調により、黔勇を率いて湖北に急いだ。呉文鎔の戦死を知った胡林翼は曾国藩のもとに身を寄せることになり、二人の協力関係がここに始まる。本稿では、胡林翼の経歴をやや詳しく述べることにする。それにより、胡林翼の人となりとともに、清代官僚の家庭生活、そして貴州省という辺境の知府の仕事の一端を知ることができるからである。

第1節 岳州と靖港の敗北

曾国藩は湖南省衡州府で試行錯誤を重ねて水師を作り出した。咸豊4年1月28日、曾国藩は湘勇の陸師・水師合計1万7千人あまりを率いて、衡州を発った。曾国藩が率いる水師は2月25日に長沙に到着、3月2日には岳州〔湖南省岳州府〕に着いたが、3月7日、苦心惨憺して作り上げた水師は大風に遭って壊れてしまった*⁵。

7日未刻、北風が大いに起こりました、湖の巨浪は山のように、臣の戦船のうち、〔湖南省岳州府臨湘県〕城陵磯で卡〔旧時の一種の関所〕を守っていたものは、5隻が沈み〔打沈〕、10隻あまりが衝突して損壊〔撞損〕しました。岳陽楼の下に停泊していたものは、11隻が沈み、20隻あまりが衝突して損壊しました。中幫水師2営と後幫陸勇2千が民船を雇って岳州に来ましたが、鹿角〔湖南省岳州府巴陵県鹿角鎮〕一帯で風に遭い、戦船8隻が沈み〔漂沈〕、衝突して損壊したものは無数です。水陸各勇で溺死した者も多く、まだ確かな調べができていません。(中略) 省河に戻り、一方で戦船を修理し、一方で敗残兵〔潰卒〕を招集し、厳しく淘汰し慎重に選び〔嚴汰慎選〕、巡撫とともに、堵剿〔逃げ道をふさいで討伐すること〕をはかることに努めています。

と曾国藩が、上奏すると、咸豊帝は「どうしてこう上手くいかないのか〔何事機不順若是〕。追って沙汰する〔另有旨〕」*⁶という朱批をつけたが、まさにその言葉通りの不運であった。3月10日には、さらに「陸路で戦敗した*⁷。曾国藩は、3月14日午刻に長沙に帰り着いた*⁸。曾国藩が上奏しているように、「命を受けて会剿に向かいながら、湖南省を出ないうちにこの挫折です」*⁹。3月22日に、「軍中要務数条」を記した父・曾麟書の3月19日の手紙を受け取った曾国藩は、「営では飯を早く食べるべきです。(中略) 行軍も四更に飯を食い、五更に出発します」*¹⁰と返信している。これ以後、曾国藩は「毎日未明に起き、夜明けとともに朝食をとり、10年余り一日の如しであった」*¹¹。

岳州の敗北に続くのが、咸豊4年4月2日の靖港における敗戦である。靖港は、長沙の北、わずか50里の距離にある*¹²。年譜によると、4月2日、曾国藩は「自ら戦船40隻、陸勇800人を指揮して靖港市で賊を攻撃しようとしたが、西南風が起り、水流が速くて停泊できず、賊に乗じられた。水勇は敗れてちりじりになり〔潰散〕、戦船は賊に焼かれ、あるいは奪われた。公〔曾国藩〕は軍が成って出てから、懸命にやった〔経営〕が、まず岳州で敗れ〔失利〕、つづいてまた靖港で敗れ〔挫敗〕、憤りが極まって投水〔赴水〕すること2度、いずれも左右に救い出された」*¹³。戦船の3分の1が、焼かれたり奪われたりした(『日誌』314頁)。

咸豊4年4月12日の、曾国藩と駱秉章の連名の〔会銜〕上奏によると、

この日卯刻、自ら大小の戦船40隻あまり、陸勇800を率いて、靖港上流20里にある白沙洲に急ぎ、機を見て討とうとしました。午刻、にわか西南の風が起り、水流が急

になりました。戦船は順風で靖港に到り、止まることができず、代わる代わる順番に攻撃しました〔更番迭撃〕。賊逆は砲台から砲撃し、見張り船〔哨船〕の一番前の帆柱〔頭桅〕に命中しました。水勇たちはいそぎ帆を降ろして靖港対岸の銅官渚に泊めました。賊衆は小割船〔小割は平底で上のあいている小舟〕200隻あまりを用いて、順風、水営に逼りました。水勇は砲撃しましたが、砲は高く船は低く、命中させることができませんでした。賊船は10隻あまり毀れ、風によって漂い散りました。水勇たちは支えきれないとみて、続々と船を棄てて上陸しました。あるいは自ら戦船を焼き、敵に与えないようにしました。あるいは逆賊に奪われてしまいました。臣・曾国藩は、白沙洲で知らせを聞き、いそぎ陸勇に、三路に分かれて靖港の賊営に向かうよう命じ、賊勢を分けることを願いました。陸勇は水勇の敗北を見て疑いと怯えを抱き、少しは斬獲しましたが、まもなく撤退しました^{*14}。

朱東安氏は、靖港敗戦の事情を次のように描写している。長沙にかまわず全力で湘潭（湖南省長沙府湘潭県）を攻撃するという計画だったのに、

曾国藩が出発する前の夜半、突然、靖港の民団がやって来て、あそこの太平軍は人数が少なく備えがなく、攻めに行けば必勝ですと報告した。また、すでに浮橋をかけた、攻撃をお助けしたい、案内をつとめると言った。曾国藩はもとの計画を棄てて、残りの水陸各営を率いて靖港を攻めた。結果は水陸で大敗〔大潰〕、長沙に逃げ帰った。曾国藩は士兵が敗走する〔反奔〕の見て、自ら剣を執って戦場で指揮し、岸边に旗を立てて、「旗を越えた者は斬る」と書いた。湘軍の敗兵は雪崩を打ったように〔山倒堤潰〕、皆、旗を迂回して狂奔し、挽回できない勢いになった。曾国藩は緑営兵が氣勢に押されて逃げる〔逃潰〕のを何度も嘲笑してきたが、図らずも、自分が訓練した湘軍もそうであった。あれこれ思いめぐらし、羞じ憤り、投水自殺して、死んでけりをつけようと決めた。幕僚の陳士傑と李元度は曾国藩が従者を去らせ、顔色が尋常でない〔神情有異〕のを見て、「小委員」章寿麟に、小舟でひそかにその後を追わせ、不慮に備えた。銅官渡まで行ったとき、章寿麟は、曾国藩が水に飛び込んで死のうとするのを見て、急いで救い、背負って船にあげ、陳士傑と李元度とともに大営に戻ることを勧めた。曾国藩は生前、銅官投水の一事をひた隠しに隠していたので、多くの方は、それを風聞するだけで詳しいことは知らなかった。曾国藩の死後、章寿麟が「銅官感旧図」を書いてこのことを記し、王闈運^{*15}に詩を、李元度と左宗棠に序を書いてくれるよう頼み、この件の顛末はようやく天下に知られた^{*16}。

曾国藩にとって、実に手痛い失敗であった^{*17}。咸豊4年4月12日、曾国藩は、

靖港戦敗、水師半潰（中略）2日の靖港水勇の潰敗は、実に微臣が謀を誤り〔調度乖方〕、

聖主に申し上げずにはいられないものがあります。去冬に論旨を奉じてから、速やかに安徽・湖北両省を助けるようにとのご期待深く〔盼望既殷〕、微臣の尽力〔効〕を求めることますます急でありながら、することはますます荒唐無稽〔乖謬〕です。(中略) 臣は軍を整え東下するにあたり、急ぎ湖南省を出ようと思いましたが、該逆が大挙して南犯し、臣の軍はたびたび敗れ、湖北省〔鄂省〕の危急を速やかに助けることができず、江面の賊気〔賊氛〕をすみやかに掃うことができず、聖主の強いご期待に大いに背きました。夜来それを思うに、罪は甚大、恥と憤りのあまり、ただ一死をもって責を塞ぐことを思うのみです。

と上奏したが、咸豊帝は、「追って沙汰する。この上奏はまったく訳がわからない。頭が混乱してしまっているのか〔另有旨。此奏太不明白、豈已昏憤耶〕という朱批をつけた^{*18}。

曾国藩は遺詔と遺片も用意していた。『曾国藩全集』では、それらに次のような脚注がつけられている。「咸豊4年4月2日、曾国藩は水師を率いて靖港の役で敗れた〔敗潰〕あと、長沙・妙高峰の宿舎〔行館〕に身を寄せたが、『全省の官紳の卑しむ〔鄙夷〕ところとなり』、朝廷と民間で、なじり非難し、口汚く罵る声が湧き起こった〔朝野群起責難唾罵〕。圧力に迫られて、曾氏は自殺して謝罪するつもりで、この遺詔・遺片を起草した。しかし2件はいずれも発出されなかった」^{*19}。曾国藩の年譜によれば、「公は長沙に戻り、南門外の高峰寺に駐営した。湘勇はしばしば敗れ崩れて〔潰〕、つねに市井小人に辱めと侮りを受けていた。官紳のあいだにも、譏り糾弾する者がいた。曾国藩は憤って、何度も自殺しようとした」^{*20}。

未発の「遺摺」には、「臣の力はすでに尽き、謹んで【按：この二字は塗りつぶされており、傍らの小さい2文字に改められているがはっきりしない】身を殉じ、遺詔をしたため、御覧を願います。(中略) 臣は恥と憤りの至りです。下流の江面を肅清できないばかりか、本省でたびたび軍を失い決まりを守らず〔失師失律〕、罪は重く、君父に会わせる顔がありません。〔以下に、「臣見事勢万不可為」の一句が削られている、との注〕謹んで北に向かって叩首し、宮城に謹んで上奏し〔恭摺闕廷〕、△△日に殉難いたします」^{*21}。上の引用文中の【 】は引用資料のものである。未発の「遺片」には、「臣は昨年以來、日夜討賊を心がけてきました〔為心〕。以前、檄文〔咸豊4年1月28日の「討粵匪檄文」〕を書き、刊刻して張り出しました。いま事は何一つ成らず、天下の物笑いですが、臣の心は死んでも甘んじません。檄文を御覧に入れます。一つには臣のささやかな志を示し、一つには士民の心を燃え立たせる〔激発〕ことを願います」としたため、陸路の将として塔齊布、水路の将として褚汝航、夏銜、楊載福らを推挙している^{*22}。

だが、天の助けがあった。ふたたび朱東安氏の筆を借りると、

布政使・徐有壬を頭として、続々と駱秉章に訴え、曾国藩を弾劾し、湘軍を解散することを要求し、一時は町中の噂になった〔滿城風雨〕。曾国藩も極度に悲観し、長沙に帰ってから着替えもせず蓬髪裸足、飲み食いせず、遺囑を書き、ひそかに〔弟の〕曾国葆に

棺木を買わせ、翌日自殺して、軍隊を失い敗北した罪を詫びるつもりであった。黎明の時分、突然、湘潭勝利の知らせが伝わってきて、一陣の大風のように、曾国藩の満面憂雲を吹き払い、また長沙城内の、黒雲圧城の形勢も変えてしまった。これ以後、徐有壬らも次第に鳴りを静め、駱秉章も態度を変え始めた（朱東安『曾国藩伝』103頁）。

曾国藩を窮地から救ったのは、湘潭での戦勝であった。褚汝航・楊載福らが率いる水師と、塔齊布らが率いる陸師が湘潭で勝利したのである。3月28日に塔齊布が湘潭で賊営を大いに破り、「連戦4昼夜、賊を斃すこと数千人。官軍が奮戦〔力戦〕して賊をたくさん殺すのは、実にこの役に始まった」と曾国藩の年譜は述べる^{*23}。4月4日、曾国藩は弟たちに、「塔副将が湘潭で大勝を挙げた。（中略）賊中から逃げてきた者はみな、広西で事が起きて以来、官兵がこのような非常の勝利をあげたことはなかったと言っている」と書き送っている^{*24}。湘潭攻陥の戦役では塔齊布の功が一番であったが、「水師が功を立てたのも、これが最初であった」^{*25}。咸豊4年4月23日、湖南提督・鮑起豹が革職となり、塔齊布^{*26}が湖南提督代理となった（『日誌』319頁）。曾国藩は、「湘潭全勝、水勇が非常に尽力したことを思い、その罪を免じ、革職とする〔加恩免其治罪、即行革職〕、いそぎ勇を率いて賊を討伐し、罪を帯びて尽力〔帶罪自効〕せよ」という咸豊4年23日の上諭を受けた^{*27}。

後年、曾国藩は、次のように弟・曾国荃を励ましている。

李申夫〔李榕^{*28}〕はかつて言った。私は鬱憤〔愠気〕を口に出さず、ひたすら忍耐、おもむろに自強を図る〔一味忍耐、徐図自強〕と。だから諺を引いて言った、「好漢打脱牙和血吞〔歯を折られたら、血とともに飲み込む。極度に、どうしようもない忍耐の比喩〕」。この二語は私が平生、歯を食いしばって志を立てる〔咬牙立志〕秘訣であるが、はからずも申夫に看破された。庚戌〔道光30年〕、辛亥〔咸豊元年〕には京師の顯貴に唾罵された。癸丑〔咸豊3年〕、甲寅〔咸豊4年〕は長沙で唾罵された。乙卯〔咸豊5年〕、丙辰〔咸豊6年〕には江西で唾罵された。岳州の敗、靖江の敗、湖口の敗、歯を折られる〔打脱牙〕ときが多く、血とともに呑み込まないことはなかった^{*29}。

また、来し方の辛かったことを挙げて言う、

第一次は壬辰の年〔道光12年〕に侑生^{*30}となり、学政が札を懸けて〔懸牌〕、文理〔文章の理論あるいは文章の筋〕の浅さを責めたときだ。第二は、庚戌の年〔道光30年〕に日講疏をあげたなかに図を1枚画いたが、それが下手〔陋〕で、九卿のなかでそれを冷笑しさげすまない者はなかった。第三は、甲寅の年〔咸豊4年〕、岳州、靖江で敗れたあと、高峰寺に身を置き、全省の官紳に軽蔑〔鄙夷〕されたときだ。第四は、乙卯の年〔咸豊5年〕、九江で敗れたあと、顔を赤らめて〔赧顔〕江西に入り、巡撫と按察使を弾劾し、丙辰〔咸豊6年〕には南昌で包圍され、官紳は誰もかれも目で笑っていた〔目笑存之〕^{*31}。

さて、曾国藩は、敗因を次のように分析している。「度胸や技〔胆技〕では兵は勇に及ばないかもしれませんが、規律では勇は兵に及びません。(中略) 毎営に1人か2人の官紳しか置きませんでした。(中略) 誤りの一です。(中略) 靖港の戦では(中略) 軽進の利のみを知り、あらかじめ退敗の地をつくりませんでした。誤りの二です。水勇にはこれまで従軍〔行陣〕した者はおらず、やむなく船戸や水手を招集して無理矢理〔編派〕軍を編成しました。訓練は1カ月に及びません。陸勇は訓練しましたが、これも長く戦陣を経た兵とともに1、2度戦ってこそ強くなります。今、戦陣を経験していない勇を駆り立てて、にわかに、百戦錬磨〔百戦凶悍〕の賊に当たらせました。一営が挫けると、全軍の気が奪われました。(中略) 誤りの三です」*³²。曾国藩は即席の水師に大きな不安を抱いていた(「焦灼」16-18頁)が、それが的中してしまったのである。

勇のモラルは低かった。咸豊4年4月4日、曾国藩は、弟たちに、「恨むべきは、(中略) 靖港に着いて賊巢を撃破〔攻剿〕しようとして、申刻に開戦し、わずか〔半頓飯〕のあいだに、陸勇が潰れ〔奔潰〕、水勇もまた次々に敗走〔奔竄〕した。2千人あまりが全て敗れてちりじりになり〔潰散〕、船砲を棄てて顧みなかった。ひどい痛恨である。(中略) 水手もまた次々に全て散じた。紅船の水手は3人しか残らず、そのほかの船は一人の水手もいない。実に第一のおかしな〔可怪〕ことである」*³³。咸豊4年4月20日の弟たちへの手紙には、「彭雪琴〔彭玉麟〕が水手に功牌〔軍功のあったものに与えられた一種の功労牌〕をやろうとしたら、水手は突然頂戴〔官帽の上端につけた等級を示す珠〕を見て、だんだん台帳〔冊〕の姓名は全て嘘だと言った。応募のとき姓名を適当に捏造して、将来〔敗走して勇が〕揃わないときに、台帳〔冊〕で搜索されないようにしていたのだ。(中略) 湘勇が自失し良心に背いていること〔喪心昧良〕が大体わかる」*³⁴。曾国藩は、「長沙整軍」をおこない、組織的な整頓をして、人員の削減と新たな募集によって精鋭部隊を作り上げた。「整頓を経て、湘軍の戦闘力は大いに上がった」*³⁵。

船も良くなった。咸豊4年7月に曾国藩は、「洞庭〔湖〕で風に遇ったのち、3月中旬に衡州に廠を設けて新船60隻を作りました。靖港敗退ののちも、4月下旬に長沙に廠を設けて旧船100隻あまりを修理しました」*³⁶と上奏している。咸豊4年6月には弟たちに、「水師戦船は、省河で修理したものと衡城で新たに造ったものは、いずれも精堅愛すべきで、昨年のもものと較べると3倍良い」*³⁷と誇っている。曾国藩の「造った戦船は、岳州と靖港で、大半がなくなってしまった。委員を置いて衡州と湘潭に廠をつくり、60隻をつくった。以前と較べて一層堅固・細密であった」*³⁸と曾国藩の年譜は伝える。

第2節 胡林翼と陶澍

胡林翼(1812-1861)、字は貺生、号は潤芝・潤之・咏芝、湖南省長沙府益陽県人である*³⁹。嘉慶17年6月6日に湖南省長沙府益陽県十九里長岡村胡家灣で生まれた*⁴⁰。家系については次のように伝えられる。「元・武宗のとき、漢清と言う者が江西〔省吉安府〕泰和県から湖

南〔省長沙府〕寧郷〔県〕の麦田に遷った。6代くだって、思敬のとき、益陽十九里泉交河の長岡村に移り、益陽県人となった。良農の家であった。その孫の文亮が岳麓〔書院〕で読書を始めた。(中略)祖父は諱は顕韶、字は律臣、県学生、貧しく、教師をしており、亡くなると郷賢に祀られた〔そのため「郷賢公」と称される〕。(中略)父は諱は達源、字は雲閣、翰林院編修、官は詹事府少詹事に至る〕^{*41}。

太平軍との戦いにおいて、胡林翼は曾国藩と並び称される人物である。捫虱談虎客(康有為の弟子・韓文挙の別号)は、「聖賢にして豪傑なのは曾公である。豪傑にして聖賢なのは胡公である」^{*42}と評した。徐凌霄^{*43}・徐一士は、「林翼は若い頃、放逸の士であり、才気をもって自ら喜び、儒先性理の学を究めようとはしなかった。後になって節を屈して学に向かい、義理を探求〔研討〕した」^{*44}と述べる。胡林翼自身も、「平生自ら才を誇り〔自謂才大〕、幼い頃から世人はみな才がないとうそぶき〔狂謂〕、狂にして傲、20歳、30歳以前はいつもこの調子であった。父に狂ではだめだと厳しく教えられて、傲気も次第に除かれた」^{*45}と記している。

胡林翼に関する史料は、曾国藩ほど多くない。日記も残っていないようである。おそらく日記をつける人ではなかったと思われる。陶海洋氏は、『胡文忠公遺集』は86巻本でも、書信は少ない。清末、手紙を受け取った人の子孫が続々と胡林翼の遺した手紙を公開した^{*46}と述べる。胡林翼は武漢を奪還する時(おそらく咸豊5-6年)、「毎日手書きで督撫たちに手紙を出していた。原稿は起草せず、公のもとの手紙をそのまま出したが、2人派遣して書き写しても手が回りきらなかったという。乱を鎮める才、神人〔異人〕はこのようなものであった」^{*47}と伝えられる。手紙は山のように書いたが、控えを整理して残す人ではなかったのではないだろうか。曾国藩とはだいぶ違う。年譜にその内容が記されてはいるが、文集には収録されていない手紙も多い。

胡林翼の年譜(嘉慶20年、4歳の項)によれば、「公〔胡林翼〕は飛び抜けて賢かった〔穎慧異常〕」^{*48}。嘉慶21年、5歳の項には、「公は天性、真心があり〔肫摯〕、郷賢公が郷里で出かけるときは必ず一緒に〔牽裾〕ついて行った。夜になると、よく一緒に寝た。郷賢公は公を非常に可愛がった」^{*49}と記されている。「胡林翼が子供のとき『おしゃべりで、親にまともわりついて離れなかった〔喜多言、好跟脚〕』のと違い、曾国藩は珍しいほど落ち着いて静か〔沈静〕であった」^{*50}と呉久民氏は二人を対比している。たしかに曾国藩は、「幼少時、端正厳粛〔端重〕であった。生まれてから3歳まで、家では泣き声が聞こえなかった」^{*51}という。

出処は明らかにされていないが、陳准氏は次のような伝説を紹介している。少年・曾国藩が、ある晩、部屋で本を読んでいた。梁の上には一人のコソ泥が寝そべっていた。コソ泥は曾国藩が寝付いたら盗みをしようと思っていたが、この坊っちゃん〔曾少爺〕はある文章をどうしても暗唱できない、夜半になっても寝る気配がない、コソ泥はとうとう激怒して梁から飛び降り、文章を最初から最後まで暗唱してみせたあと、曾国藩に、「あんたは頭がこんなに悪いのに、まだ何の勉強をするんだ」と言ってから、大手を振って出て行った。陳准氏

は、この物語は曾国藩の知能指数〔智商〕が高くないことを言いたいのであり、曾国藩についての本の多くは、愚鈍な子供が自らを励ます物語になっているという^{*52}。もっとも、曾国藩の年譜は、彼が5歳のとき、「家で学問を始めた。読誦すること聡明伶俐、竟希公〔曾祖父〕はますます寵愛した」^{*53}と伝えている。それはともかく胡林翼は利発で人なつこい、曾国藩よりよほど可愛げのある子供だったらしい。

少年・胡林翼は、のちに両江総督として名を馳せる陶澍の心をとらえた。陶澍（1779-1839）、字は子霖、号は雲汀、湖南省長沙府安化県人である。嘉慶7年の進士、庶吉士、散館後編修となる。御史、給事中、山西按察使、安徽布政使、巡撫などを歴任した。道光10年、両江総督となり、太子少保銜を加えられ、塩政を兼管した。海運を監督し、兩淮塩務を整理し、多くの功績を挙げた。道光19年に病免となるまでずっと両江総督の任にあった。諡は文毅である^{*54}。道光帝は「湖南人の陶澍を重用し、多くの督撫の意見を排して塩務・漕運改革の成功を得たので、湖南人に好感をもっていた」^{*55}と陳准氏は述べる。京官時代の曾国藩が道光帝に可愛がられて異例の出世を遂げた^{*56}のは、陶澍のおかげもあったかもしれない。

胡林翼の年譜（嘉慶24年、8歳）によれば、胡林翼が

郷賢公について益陽志館に行くと、安化の陶文毅澍〔陶澍〕は一見して傑物〔偉器〕だと驚き、七女の静娟と婚約させた。【嚴氏樹森撰公年譜にいう。郷賢公は公を連れて志館に行った。安化の陶文毅公は、給事中として川東を觀察したとき〔川東道の任に赴くため、と思われる〕、益陽を経由し、岐市に泊まって〔館〕郷賢に会いに行き、公を見て傑物だと驚き、よい婿殿〔快婿〕を得たと言って、賀夫人の生んだ娘を婚約させた。問名礼^{*57}を行った。公は8歳、夫人は5歳、父母に礼拝し、雅やかで礼儀正しかった〔彬彬有礼〕。（後略）この年、詹事公〔父・胡達源〕は一甲三名〔探花と称される〕で進士及第、翰林院編修を授かった^{*58}。

上の引用文中の【】は引用資料の小文字部分である。陶澍の娘との婚約、父親の探花及第、と嘉慶24年は胡林翼にとって幸運な年であった。嘉慶25年、9歳の胡林翼は母・湯太夫とともに北京に行った。父・胡達源は厳しく儒先性理の書を教えたが、胡林翼は「年若く才気を持ち、あまり真面目にやらなかった〔少負才気、不甚措思〕」^{*59}。

道光8年（17歳）、5月に父・胡達源が雲南郷試正考官に任命された。さらにその郷試の試験場で貴州学政任命の論旨を受け取り、10月1日に貴陽に着いて着任〔受印〕した。胡林翼は順天郷試を受けるが不合格、12月、祖父に連れられて京師を発った^{*60}。胡林翼が貴州に到着してまもなく、叔父たちに書き送った手紙を紹介しておきたい。後年、深い縁のできる貴州との出会いだからである。

昨日の朝、貴陽〔省〕に着き、祖父と一緒にまっすぐ学政署に行きました。父はちょう

ど仕事で外出していたので、夕方になってはじめて会うことができました。故郷を離れること千里、祖父から孫までが一堂に会しました。天倫の樂、これ以上ないでしょう。この地方は土地が瘠せています〔貧瘠〕が、気風は飾り気なく真面目〔拙樸〕で、京師の人士が贅沢で浪費し〔奢靡〕、偽り〔詐偽〕に巧みなのは大違いです。ただ、父は、もとより純朴だが、人材は少ない、おそらく外省と交通しないためだろうと言います。私はここで日課を定め、時間どおりに勉強し〔作事〕、怠けません。ただ孝行のあとには、外出遊覧して幽勝をたずね、眺め渡してのびのびします。また歴史遺跡をうかがい見て古人を述懐〔抒懷〕したいです^{*61}。

祖父と京師から貴州まで、一路跋涉〔行路の困難なこと。草行を跋、水行を渉という〕、苦勞しました。幸い案内に人を得たので、時日が遅れることなく、無事に着きました。(中略)こちらの気風は益陽と大違いです。貧しく質樸〔簡陋樸塞〕で、ほとんど秦漢時代のようなようです。地方の人士には開けた者は非常に少なく、有識を自任する一、二の士も、わずかに文字が読めるのみです。(中略)しかし人々はみな信諾を重んじ、取捨〔去取〕に厳しく、貧といえども気骨があり、京師の人士が輕薄で上滑りして腹黒く〔浮滑奸詐〕、自ら人品を貶めるのを惜しまず、大人先生に媚び、一命の榮を求めるのは大違いです。私はこちらで読書するほか、山水を愛し、訪れたところを、ひとつひとつ吟詠するつもりです^{*62}。

道光10年、19歳の胡林翼は、祖父とともに帰郷し、益陽の「桃花江の陶氏の別荘〔別墅〕で結婚」した^{*63}。前年、胡林翼は叔父に、男は三十にして娶ると言いませんか、と述べて、「私は幼いとき、陶丈〔陶澍〕の眼鏡にかない、初対面で愛娘と婚約させてもらいました。知己の恩は決して忘れませんが、明夏というので、遅らせてくれるよう父母に頼んでもらえないでしょうかと頼んでいる^{*64}。だが結局、道光10年2月の手紙によれば、「婚姻の延期はすでに難しいです。陶丈は、女婿〔館甥〕の古事に倣い、私を入贅させるつもりです。父母はすでに許諾していて、私には抗えませんが^{*65}。入贅婚^{*66}だったのは、陶家のほうが胡家より裕福だったためではないだろうか。結婚後、胡林翼は父にあてて、「すべて祖父が主催してくれました。(中略)新婦は気立てが温和で、読書して字を知り、生活も節儉を知っています。遠くにおられる大人を安心させることができます」^{*67}と報告している。新婦は、先述のように、陶澍の七女・陶静娟である。胡林翼の家への手紙〔家書〕では、「静娟夫人」と呼ばれている^{*68}。

『凌霄一士隨筆』に、次のような逸話がある。「林翼は陶文毅公【澍】の女婿である。結婚の話が出たとき、陶夫人〔賀氏〕はなんとか止めさせようとしたが、文毅は聞かなかった。結婚の夜、どこを探しても新郎がおらず、色里〔北里〕から引き戻された。泥酔しており、そそくさと洞房〔新婚夫婦の部屋〕に扶け入れられた。陶夫人はこれを聞くと、文毅が誤ったとひどく怨んだ。公は宥めて、おもむろに言った、『この子は大任に当たる才〔瑚璉之器〕

だ、見くびってはならない、他日大事を担うのであり、絶対に愚か者ではない。年若いときに思いのままにする〔縦情〕のは責めるに足りないことだ』*69。上の引用文中の【】は引用資料の（）である。先述のように、結婚は胡林翼の祖父の監督のもとで行われた。場所は「桃花江の陶氏の別荘」であり、近くに色里などあったかという疑問も湧き、北京での後年の艶聞が混じっているように思われる。真偽のほどはさておき、若い頃の胡林翼には芳しくない評判があったようである。

道光11年（20歳）、胡林翼は郷試を受けるが落第する。8月、陶澍は胡達源に手紙を書いて、七女は幼く〔弱小〕、母と離れたことがない、膝下を離れたがらないので、おそらく一緒に都に行くのは難しい、林翼とうちの家族とが一緒に南京〔呉〕に来て、来年ここ〔南京〕から出発してはどうだろうと書いている。その直後、9月に陶澍の息子・慧寿が夭折した。陶澍は安徽布政使だった45歳のときにはじめて息子・慧寿を得た。両江総督となり、夫人とともに慧寿を益陽桃花江の屋敷に住ませたが、わずか10歳で喉痺〔のどがはれて痛み食物を飲み込む際に激痛のある症状。急性咽喉炎などに起こる〕で亡くなってしまった*70。

道光12年（21歳）、春初、胡林翼は静娟夫人とともに、妻の母である賀太夫人を江寧〔南京〕まで送り、そのまま両江総督署に留まって陶澍の仕事を間近で見ることになった*71。この日々は、胡林翼に大きな影響を与えたと思われる。5月、胡林翼は父にあてて、「岳父から、妻の母を江南の任地まで送ってくるように言われました。妻の母は絶対に娘と一緒に行くというので、夫婦二人一緒に江南に来ました。夙に、三呉〔蘇州・常州・湖州。ここでは江南ほどの意味〕の富麗は天下に甲たりと聞いており、金陵に来てから、心して賞玩しています」として、明陵、同泰古寺（鶏鳴寺）、雨花台、莫愁湖などの名所を挙げてから、「貴州とはまた違います。貴州には天然の景勝が多く、金陵には歴史上の古跡が多いので、感想もまたそれぞれです。岳父の仕事は幹達、政声は極めて良いです。父上はこのたび貴州から京に戻られ、道は難儀で、労苦も大変でした。人の子として、お傍に付き添わず、妻を連れて南に行く、不孝は実に甚だしいです。こちらのことが緒についたら、京に向かうつもりです、大人も賛成してくださることでしょう」*72と述べている。また別の手紙では、

私は江寧で気ままに山水に遊び、精神が一変しました。岳父公は仕事のあと、よく私と長話をします。岳父の胸中のもとより極めて深く広く、くわえて数十年來の宦途閱歴があり、上下古今、あらゆる点から勘案して突き止め究め〔融會貫通〕、どの一事もあらゆる面から詳しく引証し〔傍証曲引〕、判断は秘訣〔竅要〕要領に的中し、私を少なからず進歩させてくれます。私は役所ですることがないとき、よく司馬『通鑑』を読みます〔点閱〕。毎朝池に臨んで一小時、幸いに中断することなくできます。体も元気です*73。

道光13年、22歳の正月、夫人とともに南京から北京に行った。「公はすでに成長し、聡強で豪放不羈、読まない本はなかったが、章句の学問はせず、史記、漢書、左氏伝、司馬通鑑、

中外の地図・地誌を非常に好んだ。山川や險要の地〔阨塞〕、兵政のかなめ〔兵政機要〕はとくに力をいれて詳細に研究した^{*74}と年譜は伝える。胡林翼は、「明の太祖〔朱元璋〕は八股で人材を選び、儒学はふたたび災いに遭った。(中略) 史学は歴代聖哲の精神の依り所である」^{*75}と述べている。胡林翼は『史記』を好み、「鋭敏な眼光を有し、高尚で深遠な思想を備え、文筆もまた変幻を極め、推し量ることができず、人の志気を鼓舞するに足る。蓄えた郁勃の気を、これを借りて吐き出し、広大さ〔磅礪宏大〕は、余人が足下にも及ばぬものだ」^{*76}と絶賛している。

道光13年2月、左宗棠が会試のために都に来た。胡林翼は「初対面で友人となり、互いにとても気が合った。風雨のたびに、寝台を並べて徹夜で」古今大政を語り合った^{*77}。左宗棠(1812-1885)、字は季高・樸存、湖南省長沙府湘陰県人、道光12年に21歳で挙人になった^{*78}。胡林翼の年譜(道光13年の項)によると、父の胡達源は「諄諄と、互いに励まし合い、ますます矯軽警惰〔軽率を改め怠惰を戒める〕を戒めとせよと言いきかせた」^{*79}。胡達源は2月に翰林院侍読学士(従四品)、次いで大考優等で詹事府少詹事(正四品)に抜擢、9月に「武会試副考官に任命されたが、正考官・白鎔の中巻に誤りがあるのを監督できず〔失察〕、翰林院侍講(従五品)に降格となった」^{*80}。

道光15年(24歳)、伯父の葬事と受験のために、父の命で湖南に戻った胡林翼は、長沙で郷試に合格して挙人になった。年譜によれば、道光8年から道光14年までの間にたびたび郷試を受けていた。湖南郷試の「正考官は刑部直隸司郎中、固始〔河南省光州直隸州固始県〕の王公庭蘭〔不詳〕、副考官は翰林院修撰、〔江蘇省蘇州府〕呉県の呉公鍾駿^{*81}(中略)公の巻は、〔湖南省永州府〕零陵県知県の但公文恭^{*82}【字は梓村、蒲圻〔湖北省武昌府蒲圻県〕人】の房に出た。第40名挙人に及第する」^{*83}と記されている。上の引用文中の【】は引用資料の小文字部分である。

道光16年、25歳のとき、進士、翰林院庶吉士となった。会試の「総裁は内閣学士、清苑の王公植^{*84}、工部侍郎、山陰の呉公傑^{*85}、協辦大学士、蒲城の王公鼎^{*86}、東閣大学士、呉県の潘公世恩^{*87}(中略)公の巻は同考官、礼部員外郎、満洲の宜崇公^{*88}が推した〔薦〕。第74名進士、殿試二甲第29名、朝考入選第9名、翰林院庶吉士となる」^{*89}。道光18年、27歳のとき、胡林翼は散館、編修となる。会試で都に来た左宗棠と「楽しく遊んだ〔游処極歓〕」^{*90}。降格したとはいえ父は探花、岳父は両江総督、才気に溢れた新進翰林・胡林翼に、こわいものはなかっただろう。

道光19年(28歳)、岳父・陶澍が6月に、祖父・胡顕韶が7月に亡くなった^{*91}。道光19年3月9日に陶澍が病気で両江総督を免職になった(『職官』1462頁)とき、年譜には記載がないが、胡林翼は北京から急ぎ見舞いに行ったようである。以下の陶澍あての手紙は「年代不詳」とされているが、南京から北京に戻ったあとの手紙だと推測される。文中の「呉県師」は、胡林翼の会試総裁官の一人、呉県出身の潘世恩かと思われる。潘世恩は道光19年には、武英殿大学士、軍機大臣、翰林院掌院学士を兼ねていた(『職官』96、148、1051頁)。

おいとましてから続けて4通お手紙を頂きました。(中略)12日巳刻に〔南京の陶澍のもとを〕辞去し、27日未刻に都に着きました。2500〔里〕あまり、飛ぶが如く、自分でも超人的勇氣〔神勇〕を誇ります。(中略)京に着いて父母に会うと、喜び驚き、こんなに神速とは予想以上だったと言いました。(中略)昨日、呉県師に会いましたが、師も、陛下〔聖心〕はいつも心配なさっているとおっしゃっていました。【病状については深く信じて疑わず、責任逃れと疑われてはいません。】お尋ねのたびに、人材は得がたいと嘆いておられました。すぐに近況を詳しく述べ、離職〔据退〕に忍びない意を申し上げます。師の気持ちは誠実で、それが言葉や様子に表れていました〔師意拳拳、形諸詞色〕。近日の外省大吏の賢否、江南の情形を思いのままに論じられ、岳父大人の先月の休暇願いのとき、陛下〔聖上〕は焦り、毎日代わりを考えられたが、人を得なかったとおっしゃっていました。(中略)私のしたこと〔南京まで陶澍の見舞いに行ったことを指すと思われる〕を、師は非常に称賛してくださいました。同年の慧成^{*92}に対して、天理人情の至と称し、気概のある男子〔血性男子〕に愧じない、将来経験を積めば、きっと優れた人材〔美才〕になる云々とおっしゃったそうです。我が師は周到緻密な方ですが、このたびは急にありたけを述べられました。この寵褒をきき、恥じ入るばかりです。都を出たとき、それを知っていたのは7、8人、みな近年來肝胆の士です。(中略)〔陶澍〕役所の医薬のことが毎日寝ていても覚めても私〔子婿〕の頭を離れません^{*93}。

上の引用文中の【】は引用資料の()である。陶澍の死後、胡林翼は、知人への手紙に次のように書いたと年譜は伝えている。「文毅公の喪を聞き、昼夜兼行で江寧に行き、後事を整理〔検料〕しました。役所のうしろの小楼に登り、黙って坐りました。誰もおらず、文毅の声、様子、笑顔〔声容笑兪〕を思い出し、涙がこぼれました。休暇を取っていなかったので10日で帰りました」。11月、国史館編修〔国史館纂修の誤りか。国史館纂修の漢缺は翰林官が兼任した(『典章』380頁)〕になる^{*94}。

陶澍が亡くなったとき、遺児の陶枕はまだ7歳であった。胡林翼は「賀先生熙齡〔賀熙齡^{*95}〕と相談して、これを輔け守るために左公宗棠を招聘して課読させた。郷里には、弧弱〔孤児の意〕をだまそうとする者がいた」^{*96}。賀熙齡は、陶澍の夫人・賀氏の身内であろう。胡林翼は、陶澍の妻妾に次のように助言している。陶家に対する胡林翼の思いの深さ^{*97}がわかるとともに、大官の遺族が直面する困難も伝わってくるので、少し長くなるが紹介したい。

弟〔陶枕〕の読書もまた大事です。(中略)しばし長沙に住むのが、田舎より便利です。(中略)父も守制で家におります〔道光17年、継母・劉太夫人の訃報に接した胡達源は帰郷し、道光18年から、長沙の城南書院で主講をつとめていた〕^{*98}ので、代わって経営できます。(中略)江南での香典〔奠錢〕がまだ全部集まらないと聞きました。(中略)当然早目に家に収めるべきです。(中略)このことは非常に重要で、弟が将来、読書し

役人になるのはすべてこの金にかかっています。岳父は一生苦勞して、余分な金〔余錢〕はありません。また長く官にあり、江南は事がら〔事体〕も多く、万一損失〔賠累〕があれば、家中の暮らし向きは勢いさらに困難になります*⁹⁹。(中略)以前、盧制台〔制台は総督の尊称〕【名は坤】*¹⁰⁰が広東で亡くなり、香典10万両を得ました。本来、家産も数万ありました。ただ経営に人がおらず、職権が分散し、これも管理したい、あれも管理したい、これも私心を抱き、あれも私心を抱き、今、6年も経たないのに、すでにすっからかんです。現在、仕事関係の連座〔官累〕も起き、家中はどうしようもない苦しみです〔苦楚不堪〕。これからわかるように、家の銀錢はやはり公正に預け、穏当に生活し、時を移さず節約しなければなりません。一日役人でなければ、出るものあって入るものなし、先は長いのですから、将来困らないようにしなければなりません。(中略) 今後は入る金は少なく出る金は多いことを知り、入るを量って出すのを、永久の計と考えなければなりません。(中略) 文毅の国史伝および一切の碑文のことは、林翼が謹んで速やかにきちんとやります。名を伝えるのは、林翼の責任です。(中略) 林翼の送った手紙、および外から来た密信、文毅公生前の書信・文巻・書帖は絶対に常にいちいち調べ〔点收〕てください、人に見せる必要はないです【他人に見せてはいけません】、とくに失くしてはなりません。(中略) 弟の読書は、左三兄〔左宗棠〕に頼むことができます*¹⁰¹。

上の引用文中の【 】は引用資料の（ ）である。上の文の最後にも左宗棠が登場するが、左宗棠は陶家と縁が深い。道光17年、左宗棠は湖南省長沙府醴陵県にある涿江書院の主講を務めていた。両江総督・陶澍が江西省を閲兵し、墓参のため醴陵を通ったとき、知県が館舎に飾った楹聯〔邸宅の前に立てた2本の丸い大柱に書ける対聯〕をみて驚いた〔奇〕。左宗棠の作だと知ると、知県に呼んで来させて、一晚中、打ち解けて話し合い、交際を結んで〔訂交〕別れた。道光19年、陶澍の没後、賀熙齡が手紙で、左宗棠に陶澍の子である陶桃を教えさせた。道光27年には、左宗棠の長女が陶桃に嫁いでいる*¹⁰²。

道光20年、29歳の胡林翼は、3月に会試同考官、6月に江南郷試副考官に任命された。まさに順風満帆であった。呉久民氏の軽妙な筆を借りれば、「成人に至ると『精悍さが顔にあふれ〔精悍之氣、見于眉宇〕、知音に遇うと、『自由に語り、闊歩して、意気盛んであった〔縦言闊歩、氣豪万夫〕』、25歳で進士及第、翰林に入り、昇遷したが、ここから上流子弟の風習〔純綉習氣〕に染まり、多くの風流〔風流韻事〕が伝わった。29歳で、1年のうちにまず都で会試同考官、さらに江南郷試副主考、と人も羨む紅翰林になった。春風得意、仕途順遂ということが出来る」*¹⁰³。だが、江南郷試で災難が降りかかった。

正考官である戸部侍郎、満洲、文端公・文慶と同行したとき、長江と淮河が大水で、道中は滞った(中略) 8月2日に江寧貢院に着くが、なお水びたしで、1カ月延期された。試験場に入ると文慶公は病になり、やれなかった。公は30日あまり昼夜力を尽くし、

一人で1万4千卷あまりを読んだ。(中略)疲労困憊した。(中略)下江の閱卷で、誤って上の字をつけ、安徽が1名定員を上回った〔乾隆年間から、郷試において、江南は上下江に分けられ、合格は下江すなわち江蘇省が10分の6、上江すなわち安徽が10分の4とされた〕。自ら処分を願い、降三級となった。(中略)12月、正考官・文慶が拳人・熊少牧を連れて試験場に入り閱卷させたことを監督できなかった〔失察〕ために、降一級調用となった*¹⁰⁴。

文慶(?-1856)、字は孔修、費莫氏、鑲紅旗滿洲である。道光2年の進士、庶吉士、散館後編修となる。内務府大臣、左都御史、兵部尚書、吏部尚書兼歩軍統領と累進する。軍機大臣行走となるが奪職、咸豊5年、ふたたび軍機大臣、武英殿大学士となり、戸部を管理し、上書房総師傅となる。「七転び八起〔屡罷屡起〕」であった。満漢の境〔畛域〕を破ることを奏請し、曾國藩、胡林翼、袁甲三、駱秉章らは重任に堪えると推薦した。咸豊6年に亡くなる。諡号は文端である*¹⁰⁵。年譜によれば、胡林翼は道光20年の家書に、このたび人の巻き添えを食った、癸巳の年〔道光13年、父・胡達源が武会試で正考官に連座した年〕と一轍であると書いている*¹⁰⁶。翰林院編修(正七品)だった胡林翼は降級して内閣中書(従七品)になった*¹⁰⁷。

徐凌霄・徐一士は、次のような話を伝えている。こちらのほうが一層おもしろい。

道光庚子〔20年〕、胡林翼は編修として侍郎・文慶とともに江南郷試を担当し、文慶が人を試験場に伴って閱卷させたので、巻き添えをくって降級された。近頃、張君二陵〔不詳〕の話によれば、この獄の真相は、人を試験場に入れたのは胡林翼であって、文慶ではない。文慶は胡に代わりに罪をかぶった〔受過〕に過ぎない。林翼の連れていた江西拳人の胡某が、試験場を出たあと大勢に、夙に江南は人文淵藪で他省は及ばないと聞いていたが、今、たいしたことはないのがわかったと直言した。事が露見した。文慶は林翼の才能と見識を重んじて、次のように考えた。将来必ず大いに腕を振るうことができる。もし新進で重く罰せられれば再起は難しいだろう。自分は旗員だし旧臣でもある、降級されても登用は容易い、として身を挺して罪をかぶり、降四級で鴻臚寺卿となった。林翼は坐失察降一級ですんだ。のちに文慶は果たしてまた重く任用されて政府におり、曾・胡を重用して乱を鎮めることを主張し、名相として知られた*¹⁰⁸。

道光21年(30歳)、前年に北京に戻っていた父・胡達源が世を去った。「都に着いたあと流り病にかかり、肺嗽を病むこと3カ月、病がますます悪く」なり、5月25日に亡くなったのである。64歳であった。8月に柩とともに南に向かった*¹⁰⁹。道光22年(31歳)、曾祖父以下すべて胡家彎に同居していて手狭だったので、京師から母・湯太夫人をつれて帰った胡林翼は長沙に仮住まいした〔僑居〕*¹¹⁰。道光23年(32歳)、2月、小淹〔湖南省長沙府安化県小淹鎮〕に行き、左宗棠とともに、家事の世話をした〔区画〕。賀熙齡も来たが、胡林

翼の父の墓がまだ決まっていなかったので、賀熙齡は早く葬るよう戒めた。叔父の胡達澍も教諭として赴任していた綏寧（湖南省靖州直隸州綏寧県）から手紙でしばしばそう言ってきた。胡林翼は「深く自らを咎め悔いて、澧陽書院の招聘を断り、自ら葬地を探し〔出宮〕、数カ月やめなかった。（中略）8月に喪があげ、座師^{*111}・潘文恭世恩〔潘世恩〕が門人・劉宝栢〔不詳〕に手紙を託して、公に出るよう勧めたが、公は母が高齢なのを理由に断った」、11月に父を葬った^{*112}。想像をふくらませると、賀熙齡や叔父は、陶家の世話ばかり焼いている胡林翼に、実父の埋葬が先だろうなどと説教したのではないだろうか。胡林翼は、真面目一方の実父より、岳父の陶澍に親近感を抱いていたようにも思われる。胡林翼は深く反省したようである。

道光24年（33歳）、昔、祖父が勉強を教えた紫筠園^{*113}で従弟たちの読書を監督した。旧居から1里ばかりの晏家彎に新居を築き、70歳の母・湯太夫と住んだ。「毎日、〔静娟〕夫人とともに〔母の〕ご機嫌伺いをし、楽しく笑顔で孝養を尽くし、遠くに行こうとしなかった。暇があれば地図や歴史〔図史〕を見てゆったりくつろいで楽しみ〔自得〕」、従弟の楓翼、保翼と朝夕往来し、毎日読書していた^{*114}。咸豊元年5月の親戚への手紙に次のように書かれているのは、この頃のことであろう。「思い起こせば、5年前は喪に服して帰郷し〔読礼帰山〕、終日ただ書籍を友として、文章・書画を楽しみました。春秋の佳日には、兄たちと郷村を散歩し、山水を見て回りました。あるいは老僧と禅を談じ、あるいは田野の老人と農事を話す、どんなに愉快だったことでしょう。いま文書で身体を勞し、匪盗に苦しめられています。今昔を較べると、恨みと悲しみは倍増します。竹杖と草履で、以前のように、のんびり逍遙〔祥〕していらっしゃるなら、まことに羨ましいかぎりです」^{*115}。

道光25年（34歳）、小滝まで陶文毅夫人の弔問に出かけ、左宗棠と10日間話してやっと別れた^{*116}。12月、湖南省長沙府湘陰県の仰高書院の主講に招聘されたので、翌年に従弟の楓翼、保翼を連れて行くつもりだった。だが、胡林翼の父・胡達源と同年の進士で、兩淮運使の但明倫^{*117}が年末に手紙を寄こして仕官〔出山〕を促し、捐復^{*118}の費用は任せろ〔力任〕という。胡林翼は決心がつかなかったが、会試の総裁官だった潘世恩と王植、また林則徐^{*119}、陸建瀛^{*120}が手紙で招いた。そこで胡林翼は翻然と計画を変更し、湘陰の招聘を断った^{*121}。

道光26年（35歳）、2月、従弟・保翼とともに揚州に行き、但明倫の役所に滞在した〔館〕。捐納のことがうまくいかなかったため、北京で中書〔服喪前の官職〕になるつもりであった。揚州の商捐は持むに足らずと叔父への手紙に書いているという。5月に出発して上京し、鄭敦謹^{*122}の家に滞在した。年譜によれば、6月に叔父に出した手紙に、京官で降格した缺には年内につくことができるが、昇進が非常に遅く孝養ができない、知府として貴州に行くつもりである、陝西捐例は高額で、師友に1万5千両貸してもらおうと書かれていた。6月、陝西捐輸例により、知府を捐納〔報捐〕し、貴州に派遣されることになった。龍山の友人・李如崑^{*123}が都にいて、金を出して吏となる者は、自分で地を選べる、君はどうして貴州にするのだと訊いた。胡林翼は言った。天下の官は貴州だけが、州県の吏は上に礼を以てし、金

錢〔貨〕を以てしない。自分の出資はすべて他人が助けてくれたものである。二代にわたって国恩を受けて貴州に巡り会った。亡父〔先人〕が派遣された地でもあり、その風俗はよく聞いている。自分をはじめ政治をする。この地はやせて〔貧瘠〕、清廉〔清白〕の風を保つことができ、良友の厚意に背くことがないかもしれない。これを聞いて李公は尊敬の念を起こした*¹²⁴。

徐凌霄・徐一士は、胡林翼が貴州省の知府になった経緯を次のように説明している。

江南〔郷試の〕門生の某が、会試のとき、同年の有力者を集めて言った、「われらは二人の座師の知遇を得た。平然としてはいけぬ。文老師〔文慶〕は国家大臣であり、陛下の心は明らかにあり〔帝心簡在〕、旗籍でもあり、昇進の道は速く、まもなく再び政治をまかされる〔柄用〕だろう。胡老師〔胡林翼〕は新進でにわかに連座に遭い、おそらく再起不能である〔一蹶不振〕。だが、その才気は人に勝り、もし外吏になれば、必ず功績をたてることができる。ただ家は素封ではない。我らはどうして助けぬのか。」皆はそうだとし、資金を出し合って、林翼のために知府を捐納した。これが林翼が外官に転じた〔改外〕由来である*¹²⁵。

もし胡林翼が貴州省に行かず、京官として都でその能力を発揮していたら、それも歴史を変えていたかもしれない。

第3節 胡林翼の貴州時代

胡林翼は、道光27（1847）年から咸豊3（1853）年まで、7年間を貴州で過ごした。曾國藩が（少なくとも傍目には）清閑で優雅な京官生活を送っていたころ、胡林翼は貴州で一通りでない艱難辛苦を経験した。曾國藩は任官してから一貫して京官であり、四川郷試の試験官をつとめたことはあるが、地方官になった経験はない。帰郷するまで軍を率いたこともなかった。胡林翼は貴州省で、末端に近い知府となり、自ら訓練した勇を率いて山深い瘴癘（マラリアのような、気候・風土による伝染性の熱病）の地を駆け回って、盗賊の討伐にあたるのである。

道光27年（36歳）、3月に帰宅し、支度を整えて出発を待ったが、祖先の墓にあまねく詣で、官職にあって一銭たりと私腹を肥やして先祖をはずかしめることはしないと誓った。4月1日に湯太夫人が家族を率いて上船し、胡林翼は小淹に寄ってから、常德で合流した。従弟の林保翼も府経歴として同行した。6月に貴陽に到着、11月に安順府知府代理となった*¹²⁶。胡林翼には男兄弟がないので、任地に母を連れている。小淹では、陶家を訪れたのであろう。貴州に到着した胡林翼は、従弟たちに次のように書き送っている。

貴州は父が派遣された地であり、私も長く滞在した。風俗はよく知っている。天下の官

方〔官吏の守るべき礼法〕は、日に日に悪くなっている。金を納めて吏となる者はみな良い土地を選んで私腹を肥やそうとする。貴州は土地の瘠せた〔磽瘠〕ところ、辺僻の境である。人がそっぽを向いて顧みないところだ。だが私はひとり貴州を取る。まことに、貴州の官吏は上に金銭〔貨〕でなく礼を以て対することができる。礼を以てすることで自重を知り、金銭〔貨〕を以てしないことで民を哀れむことを知るので、治を望むことができる。私は初めて政を成す、貧しい〔貧瘠〕士に遇えば、清らかな気風〔白風〕を保つことができ、国に背くことにならない。私は貴州に入るにあたり、先祖〔先人〕の墓に行き、赤誠を尽くし、謹んで仕事をし〔恪恭将事〕、それによって知遇に報いることを誓った。もし一銭でも家を肥やしたら、神に殺される*127。

道光28年(37歳)、插花〔飛び地のこと〕の多い貴州のなかでも安顺は特に多く、「近く〔肘腋之下〕はすべて他境の民、傍〔臥榻之傍〕はことごとく他人の地である。教え諭すべき、整頓すべき、公明にすべき、捕らえ駆逐すべきはすべて遠く数百里の外にある」という難しい土地柄だったが、「官の小事は、庶民の大事」*128として胡林翼は仕事に精励した。「1年前後で、巨盗200あまりを捕らえ、府は肅然とし、盗賊は衰えおさまった〔衰息〕」*129と年譜が伝えるように、胡林翼は治安の回復に努めている。さらに、「貴州の知府は、任地〔分地〕で自ら詞訟を処理することができた」ので、胡林翼は「未解決の案件〔積案〕300あまりを片付けた」*130。「義学を10数区に建てることを首唱し、節孝〔節婦孝子〕800人あまりを探訪して表彰を申請した。安顺200年、役人が節孝を詳しく報告するのは公から始まった」*131と言われるように、民の教化にも力を注いだ。

道光29年(38歳)、3月に安顺の職を辞し、閏4月、鎮遠府知府代理となった。鎮遠は遠いので、母の湯太夫人は貴陽に留まった。鎮遠は湖南省につながる無水のほとりにあり、苗族や瑶族が多かった*132。道光29年3月、胡林翼は従弟にあてて次のように書いている。

すでに安顺府の職を離れ、一度帰郷しようと思っていた。(中略)しかしすでに鎮遠代理の命を受け、期日が迫り、願い通りにいかなかった。官場の仕事は、難しいようで難しくなく、易しいようで易しくない。上に引き立て〔輿援〕があり、下につきあい〔聯絡〕が多く、することなすこと、大逆不道とは言わなくても、とにかくうわべをごまかす〔敷衍〕ことができる、これが難しそうで実は難しくないということだ。しかし孤立無援であれば、長官の機嫌を損じて、ひとたび咎め立て〔挑剔〕されれば、さまざまになんくせをつけられ〔留難〕、留まることを求めて不可、去ることを求めて不可、境遇はまさに苦しいものとなる。これが易しそうでいて易しくないということだ。貴州は亡父が昔訪れた地、私は仕事を少しもいいかげんにしない。それゆえこのたびの引き継ぎ〔交代〕はよい〔順手〕と思う。鎮郡〔鎮遠府〕は盗みが盛んで、治めるのは安顺とくらべて難しいと聞く。しかし私はもとより困難を畏れないので、行って試してみることに決めた*133。

道光29年閏4月の手紙に記された、前任からの引き継ぎ場面は臨場感にあふれている。

鎮〔遠〕府には昨晩着いた。今朝引き継ぎをした。前任の馮令は、欠損〔虧空〕が巨額であるが、それは公のためであり、また極端なことはしないと思う。馮令は、感慨深く私に言う、「すでに花甲を過ぎ、家には老母がいて老いさらばえており、子は不肖、この老体に鞭打って、3千里のそとで衣食を謀っています。この辺りの人民は凶暴〔強悍〕で、盗賊〔匪盜〕は絶えず出没し、略奪・放火殺人〔燒殺〕・捕縛への抵抗〔拒捕〕などは日常茶飯事、異とするに足りません。歳なので、どうしてこの重任に耐えられましょう、免職に至りました。懲戒免職は当然のことで、どうして怨みましようか。ただ今後どうやって暮らしていくのでしょうか」、そう言って泣きじゃくる。宦海には、この馮翁のような人がどれほどいるのかわからない。ため息が出る。私はここに長ければ1年、短かければ5カ月いることになる。しかし都に戻りたい〔京兆之念〕とは思わない。1日官にあれば、1日力を尽くす。いい加減に責任を塞ぎ、粉飾して人を欺き、上に君父に憂を残し、下に先祖〔先人〕を辱めることはしない*134。

次第に鎮遠の実情がわかってくる。上の手紙のおよそ20日ほど後には、「鎮遠に着任して以来、細かく視察すると、災害〔水火〕・盗賊、ことごとに心配なことがわかりました。(中略)前任の馮令は凡庸でいくじのない人です」*135と叔父あてに書いている。貴州巡撫・喬用遷に対しても、「鎮遠という府は、災害〔水火〕・盗賊、ことごとに心配です。(中略)自分で行ってみて初めてその難しさがわかります。民を以て民を衛る〔以民衛民〕ことによつてのみ、賊を入れないことができます」*136。8月に引き継ぎをして貴陽にもどり、10月には武郷試監試官をつとめた。鎮遠府黄平州の巨盗が雲南・貴州の公車を襲い、12月、巡撫・喬用遷に討伐を命じられた。年末だったので、ゆっくり出かけてはと言われたが、胡林翼は、兵は神速を貴ぶと言って大晦日の前日に兵を集め、およそ1カ月で仕事を終わらせた。論功で、知府として貴州に留め、繁簡を問わずポストが空けば即補せよとの旨を得て、花翎を与えられた*137。

道光30年(39歳)、湖南省宝慶府新寧県の李元発が乱を起こしたので、湖南省・広西省に隣接する黎平の防衛を命じられた胡林翼は、2月に黄平を出発して黎平に進駐し、賊を追って広西省柳州府懷遠県古宜鎮まで行った。巡撫がその功を上奏し、道員として用いよとの旨を得た*138。3月に新帝・咸豊帝が、司道以下で大任に堪える者を推挙せよと大臣たちに命じたとき、雲貴総督・程喬采、貴州巡撫・喬用遷はいずれも胡林翼の名を挙げた。すみやかに来京して送部引見*139との旨を得たが、喬用遷が辺境防衛の仕事が切迫している〔辺防事亟〕として延期を申請した。しかしこれ以降、胡林翼の評判〔官声〕は皇帝に達し、雲南・貴州の大小の群臣百官が入朝謁見〔入見〕すると、咸豊帝はしばしば胡林翼のことを訊ねたと年譜は伝える*140。道光30年9月、思南府知府代理に任命された*141。

咸豊元年(40歳)、6月、思南府の仕事を引き継ぎ〔交卸〕、黎平府知府を補授された。入

京を申請（「請咨」とあるが「咨請」か）することに決めたが、督撫〔大府〕は、広西の賊が厄介だ〔棘〕として、本任に戻るよう命じたので、7月、黎平に到着して着任〔受印〕した^{*142}。咸豊元年4月の手紙で、「すでに思南府の仕事は離れて、黎平代理に來た。黎平は会匪〔秘密結社の匪徒〕が最も多い。（中略）昨日当地の士紳と接見すると、30年来、地方は匪賊の集団に蹂躪され、無道〔暗無天日〕だと憤慨して言う。今日また殺人強盗事件〔命盜案〕があった。（中略）恐らくこのような案件は、黎平では普通のことと見なされている」^{*143}と述べている。黎平については、「貴州は12府1州3直隸庁、黎平は人心が最も厚く、また黎平が最も貧しい」^{*144}、「黎平地方は、地瘠せ民貧しく、苗民はとりわけ苦しい〔苦累〕」^{*145}と胡林翼は言う。黎平府の周囲は稲ばかりで春花を見たことがない、自分の志は「教え育てること」にあるので、この肥沃な土地が荒れ果てるのはとても惜しいと思う、種はすべて地主が買って支給するようにと指示したりもしている^{*146}。母の「湯太夫人は道が不便〔梗〕なのを案じて、鎮遠試院〔試験場〕に留まった」ので、12月には「鎮遠に帰り、母に会う」^{*147}と胡林翼は忙しい。

年譜の咸豊元年の項によれば、「自ら壯勇100名を訓練し、明の參将・沈希儀、嘉慶年間の傅籛に倣い、因問〔敵の同郷人であるがゆえに用いる間諜〕雕剿の法^{*148}を用いた。（中略）往々10日間帰らず、帰れば文書を埋める〔填委〕のに必ず自ら調べて〔檢料〕、昼夜苦勞したが、終わるまで休めなかった〔訖不得息〕」^{*149}。沈希儀（生没年不詳）は広西省潯州府貴州人、広西省で少数民族の乱を鎮めた^{*150}。傅籛（?-1811）は嘉慶年間に湖南省と貴州省で苗民平定にあたった人物である^{*151}。咸豊元年4月の従弟への手紙では、胡林翼は、「洪逆〔太平軍を指す〕の一派が黎平に侵入〔竄入〕してからはじめて憂慮するのではだめである。（中略）目前の小集団〔小股〕は他日の大集団〔大股〕である、目前の小盗は他日の大寇である」と述べ、黎平は「実に往來の四通八達の地〔通衢〕、他の場所より緊要である」と言い、「毎月使うのは1千両にすぎず、兵を1千動かす場合の4分の3を省け、効果は倍であり、徴用・派遣の面倒もない。土着の民が郷里を守る気持ちは切実で、勇気も自ずから倍になる」^{*152}と民による自衛を重視している。

貴州巡撫・喬用遷への咸豊元年の手紙では、胡林翼は、「兵は怯懦、屬吏〔差〕は狡猾であり、郷民が飾り気がなく真面目〔樸實〕であるのに及びません。（中略）昔、戚南塘が練兵するのに、城市の人を取らず、必ず農民を選んだのはこのためです」^{*153}と述べている。戚繼光（1528-1587、号は南塘）は倭寇との戦いで知られる明の名将である（『清史稿辞典』1706頁）。戚繼光の書いた兵書『紀効新書』には、「第一に、城市の狡猾〔遊滑〕な人は絶対に用いてはならない。顔がすべすべして白く、動作が敏捷な者がこれである。ざる賢い人は、態度が不定で、役人を見ても軽視して憚るところがない。第一に用いるべきは、郷野老実の人〔田舎の真面目な人〕である。郷野老実の人というのは、色が黒くて体が大きく頑丈で、辛苦に耐えることができ、手の皮肉が堅く、土仕事をしている色をしている。これが第一である」^{*154}と書かれている。曾國藩も、傅籛や戚繼光のやり方を学んでいた（「焦灼」8頁）。

咸豊元年5月、呂佺孫が四川按察使から貴州布政使に遷った（『職官』1617頁）。呂佺孫と、貴州按察使（任：道光30年-咸豊5年。『職官』2154-2159頁）の孔慶鋤とは、いずれも胡林翼と同じ道光16年の進士・庶吉士、親密な間柄〔薇柏無間〕であった*¹⁵⁵。胡林翼は咸豊元年に、呂佺孫に次のように訴えている。

およそ360日、事件は毎日1件にとどまらず、1件もまた1命にとどまらずです。（中略）必ずや広西の二の舞〔続〕になります。（中略）前任者たちのいう団練は、いずれも文書で通告した空文にすぎず、実際の形跡はありません。〔私は〕着任2日で、自ら郷に行って監督し、委員3人を派遣〔分派〕し、紳士9人を同行させて分担させました。（中略）古人の彫劓の法をまねて庶民を声援します。（中略）10日のうち3、5日外にいと、役所の公事がたまります〔蝟冗〕。3、5日役所にいと、潜伏していた盗賊〔寇盜〕が蜂起します。全身全霊でやっても〔五官併用〕手が回りきらず、才能薄弱でこの重任に耐えられないことを慚じます。とりわけ心配なのは、前任の某公が、ここで隠匿した事件が数え切れないことです。（中略）私〔卑府〕は、精力を惜しまず経費を惜しまず仕事をしています。5年間貴州にいますが、自ら問うてなお人に恥じることはありません〔可対人〕。（中略）兵権は全くなく、ただ自ら練勇を募り、みずから褒美の金銭〔賞資〕を工面するのみです。（中略）天性愚かで拙劣、一事として狡猾にできず、一事として大目に見る〔放鬆〕ことはできません。艱難の地にあり、終日焦灼、これが耐えられない〔不支〕ゆえんです。母は鎮遠〔撫〕におり、貢院に寓居しています。76歳、まだ元気です*¹⁵⁶。

咸豊2年（41歳）、3月の従弟への手紙には、「すでに乱が起きたのは治め易い、まだ乱が起きていないのは治め易い、乱れようとするのは治めるのが難しい」*¹⁵⁷と書かれている。7月、張亮基が雲南巡撫から湖南巡撫に遷り、胡林翼を「襄辦軍務」〔襄辦は協力・助力の意〕に奏調し許された〔報允〕が、貴州巡撫・蔣霽遠（咸豊元年10月に喬用遷が死去したあと、貴州巡撫に就任）*¹⁵⁸が、士民が失望し、関係するところは軽くなく、事は全省の大局に関わるとして、上聞にいて留任を乞い、胡林翼は動かす必要はないという論を受けた。胡林翼は10月に黎平府知府の職を離れた*¹⁵⁹。12月に武昌が陥落し、湖南省では、その知らせを受けた曾國藩が、重い腰を上げて長沙に向かうことになる。

貴州省でも、鎮遠府・都勻府・〔鎮遠府〕黄平州・〔平越直隸州〕瓮安県に蟠踞〔蟠結〕していた苗匪・榔匪の勢いがますます激しくなった。督撫の命で、胡林翼は黎平府・鎮遠府・思州府・都勻府・銅仁府・松桃直隸庁一帯の防衛・討伐〔防剿〕を総管することになった。また、鎮遠に讞局（讞は罪を詮議するの意）が設けられて、胡林翼が監督〔董〕した。11月、黎平から練勇200名を率いて出発し、鎮遠府清江庁の烏沙に着き、巨盜の捕縛などにあたる。鎮遠府に戻り、母のもとで年を越した*¹⁶⁰。咸豊2年の湖広総督・程喬采への手紙には、「林翼はいつになったら都に行けるかわかりません〔入都無期〕。老母は高齢で、黎平は道が険

しいので、鎮遠に住んでいます。二つの地が気にかかり、深く思いを馳せます」*161と書かれている。

防衛は民の自衛に限ると胡林翼は言う。胡林翼によれば、黎平と、広西省の桂林とは6日ほどで着く距離であった*162。胡林翼は咸豊2年に、「遠方の怠け者〔惰民〕を集めていっばいにする〔充棟〕するより、地元の農民に自守させるほうがいい。(中略) 貴州で桂林と最も近いのは黎平である。(中略) 貴州を広西〔粵*163〕と較べると、兵力は10分の1に及ばない。広西〔粵〕が戦えないのに、貴州に何を望もうか」*164と述べている。

広西の情勢について、咸豊2年に胡林翼は次のように言っている。「広西〔粵西〕の兵・勇は6、7万人、いずれも各省で選募したものである。随行の人丁・夫役〔余丁夫役〕、さまざまな人手〔各色人工〕も2、3万人を下らない。費した公金はすでに1200万両を超え、兵力や軍費〔餉項〕は厚くないとはいえない。しかし永安〔広西省平楽府永安州〕を囲んでいたとき*165、終日挑戦して、6、7カ月もたったが、賊はついにしななかった。(中略) 永安を逃げ出した〔竄逸〕あとは、負けな戦はなかつた」*166。貴州布政使・呂佺孫に対しては、「もし〔咸豊元年〕閏8月、永安城外20里の地に、毎日夫役10万を用い、1人1日銀1銭を与えていたら、6カ月もやっても使うのは180万〔1800万か〕人、費用は銀200万両に及びませんでした。(中略) 賊はどこから逃げられましよう。この天下で最も拙劣な計は、公金〔帑金〕700万を浪費するのに較べると、なお巧みです」*167と、壁や堀を築いて敵を閉じ込めるべきだったと述べる。

咸豊2年、胡林翼は張亮基に訴える。「さらに10万兵を移動させても、決してこの賊〔太平軍〕を破ることはできません。軍備は廃れ、すでに救いようがない状態になっています。それに兵のいるところには賊はおらず、賊のいるところには兵はいません。兵と賊はついに会わなことがないのです。(中略) 士と民を用い〔用士用民〕、堅壁清野〔陣地を死守して敵の進攻を阻み、退却にあたっては一切の物資を埋蔵または焼却して敵の利用を妨害する戦術〕、守るなかで戦う〔守中言戦〕、このほかに良策はありません」*168。胡林翼は、人に欺されることも意に介さない。これも曾国藩と違ふところではないだろうか。張亮基に対して述べるには、「堅壁清野は士と民を用いなければ上手くいきません。士や民のなかに、どうして我を欺く人がいないことがありましようか。また事を壊す〔僨事〕人がいないことがありましようか。しかし兵・将で狡猾な者は10のうち9、士・民で質朴な者は10のうち6です。近年、官途は雑多〔雑〕で、知州・知県〔牧令〕に真の才人は少ない上にまた、佐雜にはとりわけ見識が浅く、勝手なことをする者〔庸妄〕が多いです。(中略) 一事で欺いたからといって事々に欺くことはできません。一時欺いたからといって、その後まで欺くことはできません。欺きは防がなければなりません、欺かれたからといって、がっかりしては〔灰心〕なりません」*169。

胡林翼の軍事は玄人の域に達してきた。火器に頼りすぎるのは良くないと胡林翼は言う。咸豊2年に、胡林翼は述べている、「近日の武營の良くない風習〔陋習〕は、火器を恃み白兵戦〔殺手〕の練習をしないことである。(中略) 広西〔粵〕での軍の敗北の半ばはこのた

めである。兵は火器で強くなるが、また火器で弱くもなる。練勇の数は多くないほうがよい。精銳〔精〕で数が多くなければ、一人で百人に当たることができる。数が多くて精銳でなければ、百人で一人に当たることもできない。〕^{*170}。咸豊2年、練勇について、胡林翼は「毎日3回真剣に演習しています」^{*171}と述べ、咸豊3年にも、「私の練は教訓することですでに久しく、3回賊に遭いましたが、いずれも恐れて退くことはありませんでした」^{*172}と自信をもっている。

咸豊3年（42歳）、1月、練勇を率いて烏沙に行き、さらに都匀府清平県の凱里に移駐し、強盗の捕獲などにあたった。2月、湖広総督・張亮基はまた、一時、湖北巡撫を代理していた駱秉章と共同で上奏〔合疏〕して、胡林翼を湖北省〔鄂〕に呼ぼうとしたが、咸豊帝は、胡林翼が貴州のことに慣れており、他省にやるのは人と土地が合わない〔人地未宜〕として、許さなかった^{*173}。4月、鎮遠府に戻って母に会う。鎮遠府黄平州で騒ぎが起きたのでおさめに行くように命じられる。後述の唐樹義^{*174}が病と称して家にいたが、詔で起つことになり、手紙を寄こしたので、胡林翼は数日引き留められ、歡を尽くして別れた。胡林翼は、自ら練勇200人を率いて鎮遠を出て、鎮遠府黄平州旧州〔旧州城は黄平州の境内にある〕に着いた。ことが片付くと幾ばくもせずにもまた、瓮安〔平越直隸州瓮安県〕で事件があった^{*175}。胡林翼は、咸豊3年〔8月30日、黎平の練勇〔黎練〕250名、鎮遠の練勇〔鎮練〕70名を率いて、瓮安に急ぎ到着した〕^{*176}。およそ60日間で事は終わった^{*177}。

胡林翼を最も苦しめたのは、流言であった。年譜は言う、「公は連月、瘴癘の地を駆け回ったので、心身ともに疲労困憊〔神悴形訖〕、休めなかった。しかし官場には流言があり、功を貪りほしいまま〔擅〕に人を殺していると公を譏るものまであった。公は考えた、東南はわきかえり〔糜沸〕、貴州は吏治は駄目、軍備は久しく弛み、漢族と苗族が錯雑した処には匪賊が潜伏〔伏莽潜滋〕、旦夕で救えるものではないと。さらに、太夫人が非常に高齢で、長い間鎮遠府にいて、いつも郷里を思い、泣くことすらある。こうして公も物憂くなり、去りたくなった」^{*178}。咸豊3年には、知人への手紙にも、「省の流言は、黎平を上傷〔謠言〕しないときはありません〔無日無時〕。（中略）『千人に指さされたら病なくして死す〔千人所指、無疾而死』』とことわざに言います」^{*179}と書いている。

貪功（功を貪る）と言われるのは、特に心外であった。咸豊3年、胡林翼は言う。

貪功の二字はとりわけ違う〔不然〕。（中略）安順で会匪・凶盗を100名あまり除いたが、一字も報告していない。鎮遠の4カ月でほとんど200の大盗を除いたが、文書のある〔有案〕ものは同僚に贈与して獲叙させた。文書のないものはすべておまけだ〔便宜〕。2回委員となり、318名を捕らえ、すべて報告した。黎平に来て1年あまり、盗を除くこと約300名だが、報告できたものは30、40名に過ぎない。もし盗賊捕獲を榮達への道〔梯榮之地〕とすれば、以前のことですでにほとんど千人に及ぼうとする。なお、これを貪功と言うことができようか。ただ私は平日事をするのが性急〔偏急〕で、いつも人を責め、人を許容することができない。これは学問の浅さだ^{*180}。

咸豊3年の左宗棠への手紙は、「天下が乱れば法が密になり、密になれば必ず乱れる。天下が治まれば法は疏となり、疏になれば必ず治まる。これは不滅〔不刊〕の至論である」と名言を述べ、「林翼のいるのは一府にすぎないが、その仕事は、終日、手は絶えず〔文書を〕広げ、口は絶えず喋っている。(中略) 一人の精力はどれほどのものか。もし文書に過度に労力を費やせば、小事瑣事に疲れ、遠大なことはやれない」とこぼし、貴州での経験を次のように振り返っている。「貴州に来て7年、4回知府を務めた。黎平にはかなり尽力し、安順がこれに次ぐ。鎮遠は4カ月のみでその下〔斯下〕である。思南は8カ月で最も安逸で余裕があったが、あまり新政はなかった」*¹⁸¹。貴州時代に、胡林翼は左宗棠を世に出す努力を続けたが、これについてはまた別稿でふれたい。咸豊3年11月、胡林翼は入京を願った〔請_マ咨〕が、許されなかった。胡林翼の会試の「同年」である御史・王堯桂*¹⁸²が胡林翼を疏薦し、湖北で賊を討伐させるよう述べ、湖広総督・呉文鎔も、胡林翼が黔勇をひきいて応援に来るよう奏調した*¹⁸³。

咸豊3年、貴東道を辞退する手紙が、胡林翼の心情をよく物語っている。

近頃、省の消息〔省信〕を受け取りました。それによると、西道〔貴西道。安順に駐在〕は湖丈〔孔慶鋤であろう〕、東道〔貴東道。古州庁に駐在(『清史稿』巻75、2365頁)]には暫時私があたる〔暫護〕うんぬんということでした。世間のうわさ〔道路伝言〕ですが、本当でしょうか。(中略) 私は盗匪の足跡のあるところに營を移して向かい、もともと一定の住所はありません。近月以来、地方官や委員たちの力によって、盗賊の勢いは次第に衰えています〔衰息〕が、なお10数犯をまだ捕らえていません。長いあいだ捕縛を監督していますが、隠れて行方が知れず、焦憤のあまり、寝食共に廃れています。近ごろはまた持病が出ています。(中略) 古州は(中略) 春夏秋の3つの季節は燃えるような酷熱で、瘡癘は尋常でありません。(中略) 私は2回榕城〔古州庁の町である榕江〕に行きました。時は秋冬でしたが、日中は汗が背中じゅうを流れ、夜間は掛け布団を重ねても温まらず、病を抱えて帰りました。(中略) 母は78歳、安順でつまずいて左足を怪我し、医者に診せて治りましたが、起居には人の助けが要り、勢い道を歩くことはできません。また、左目はくもり〔瞳神雲翳〕、昨冬今春は、痰咳がとくにひどく、一夜のうちに1、2碗吐きました。昨年、一昨年と、私は再三、黎平に迎えようとしたが、母はやはり鎮遠が水辺に近く、帰郷できると言います。(中略) 内地盗匪をやったら、帰郷をお許しいただきたいと思えます*¹⁸⁴。

胡林翼は決して生来病弱ではなく、身体の鍛錬を重視していた*¹⁸⁵。貴州での過酷な日々が、よほどこたえたのだろう。咸豊3年の知人への手紙によれば、「病は日に日に増し、下血注ぐがごとしです」*¹⁸⁶。

私財を擲って練勇など治安維持に努めてきたが、資金も続かなくなった。咸豊2年に、黎

平に「着任以来、招いた練勇は100人、毎月1人4千〔文〕、(中略)人を増やさなければなりません。以前はまだなんとか自分で寄付〔自捐〕していましたが、いまは、そちらの公金〔憲帑〕で援助していただくのを望むばかりです」*187と布政使・呂佺孫に頼んでいる。胡林翼はかなりの負債*188を作っていた。咸豊3年、「黎平での防衛捕縛〔防堵緝捕〕は、最初はまだ私財がありました〔有私囊〕。(中略)私財は尽きました」*189と述べている。

咸豊3年の曹興仁への手紙にも、貴州に留まることのできない理由が切々と書かれている。曹興仁については不詳だが、文面からみて、平越直隸州と大定府で直隸州知州や知府などをつとめたことのある官員であろう。経済的困難についての箇所を中心に紹介してみると、

黎平に来てから、群盗が非常に多く、多額の費用を携え、在官中に貯めた金を使い果たし〔破宦囊〕、その場をしのいできました。(中略)林翼には久しく利欲の心はありませんでした。黎平の2年間、家計〔私計〕は長いこと赤字です。家僕は非常に清貧で、やめさせた者5、6人、残った2、3の廉潔・慎重な者も去ります。貴州にいた8年、綺城、小雲〔この2人については不詳〕、そして貴下に融通していただいたほかは、交情は極めて少なく、昨秋から今まで借金したのは、鎮遠〔撫中〕の商店です。目下すでに1800〔兩〕、商人〔市売〕はみな貧しく、借金も難しいです。これが家計の言状できないものです。(中略)私が財を求めないのは本心ですが、一家数十人、鎮遠に寓居して3年、郷里に帰せば、貧しいながらも暮らしていけます。(中略)要するに、貴州の8年間で艱難は嘗め尽くしました。知府を務めた〔握印〕のは4年に満たず、兵を率いたのは3年に及ぼうとしています。犬馬の力は疲れましたが、ついには小人をもって私を見ます。また何が楽しくて長くこの小人でいるのでしょうか。去る意志〔去志〕はすでに決しました。絶対に撤回しません。すべての詳しい事情は怒りが高ぶるので、上には言う必要はありません。ただ去ることを求める気持ちは非常に堅く、11月初旬までに、この気持ちを随時代わりに述べてほしいのです。(中略)鎮遠の試験のため居を移さなければならず、すでに舟仕度をして荷物をまとめました。(中略)黎平行きはいつですか。(中略)職〔缺分〕の苦、仕事の繁、平越・大定〔平越直隸州と大定府。いずれも貴州省〕とは比べものになりませんが、保甲・団練はちゃんとして〔成法〕散漫でなく、内地の盗匪はほとんど一掃しました。これは私の2年間の心血です*190。

上の引用の最後に、黎平での成果が書かれているが、咸豊3年の別の手紙にも、黎平府は昔、賊が多かったが、着任後、「保甲・団練に努め、関所〔卡房〕300あまり、防御陣地〔碉堡〕50あまりを増設した。一年來、地元の紳民が内外の盗匪300名あまりを捕獲し、すでに実に静謐である」*191と胡林翼は書いている。

湖広総督・呉文鎔による奏調のおかげで、咸豊3年12月10日、胡林翼は黔勇を率いて鎮遠を発ち東に向かった*192。胡林翼は練勇300人を率い、湯太夫人を連れて、鎮遠を出発したのであり、「これが、公が東南を手がけた〔規劃〕始めである」*193と年譜は言う。冒頭

でもふれたように、呉文鎔は胡林翼の父・胡達源と同年であり、道光30年から咸豊2年まで雲貴総督だったこともあり、「情は父子のように親しかった」*194と呉久民氏は言う。胡達源は嘉慶24年の探花（一甲第三名）、呉文鎔も同科二甲24名の進士であった。胡達源は翰林院編修になり、呉文鎔は庶吉士となり散館後、編修となった*195。胡林翼が、ある書簡のなかで、呉文鎔のことを「呉甄丈」*196と書いていることから両者の親しさがわかる。呉文鎔の字は甄甫、「丈」は老年男子に対する尊称である。

胡林翼は、郷試の房師である但文恭（当時、湖南省永綏直隸庁同知）に、湖南省鳳凰直隸庁の鎮守の精兵は有名だとして、自分に代わって精壯を募ってくれるよう頼んでいる*197。

三庁〔湖南省西部の乾州直隸庁、鳳凰直隸庁、永綏直隸庁、晃州直隸庁などか〕は従来壯士が多いです。本当に死を恐れぬ人がいるのでしょうか。（中略）林翼は壯勇を一心同体〔一身一命〕と見て、甘苦を共にします。病氣や死亡の補償は最も重くします。ただ狡猾な人〔油猾人〕、臆病で畏縮した人は用いません。毎月の支給〔工食〕は4千〔文〕を基準とし、頭目は5千6千とします。砲〔擡砲〕や旗は林翼がすでに準備しました。紳士のなかで兵事がわかり、胆力と識見があり、気骨があり、一身を顧みず、金や財物を受けぬ者を2、3人選んで管領して下さい。林翼が辰谿〔湖南省辰州府辰谿県〕に着いたら、舟を岸につないで試験〔考験〕します。（中略）250斤の巨石を持ち挙げられる〔石掇〕〔掇石。清代の武拳郷試・会試の科目の一つ〕者、弓は八力を引ける者、銃砲は10のうち7、8が命中する者、刀・矛は身のこなし〔身法〕・技巧〔手法〕がある者、泳ぎのできる者、屋根に飛び上がれる者、1日に180里進める者、兵器・火薬・攻具を精製できる者、船を操れる者、最も大事なものは、飾り気がなく真面目で労苦に耐え〔樸実耐勞〕、度胸が信用できることです。もし義勇2、3百人を得れば、その力をかりて湖北の賊を平らげることができます*198。

湖北省の金口〔武昌府江夏県金口鎮〕に着いた時、率いていた勇600名のうち300名は、辰谿を通ったとき新たに募った300名であった。咸豊4年正月、船が湖南省常德府龍陽県の西港に泊まり、叔父たちが風雪を冒して会いに来た。人を遣って湯太夫人と親族を益陽の屋敷に戻らせ、自分は勇600名を率いて呉文鎔の応援に向かった*199。

第4節 曾國藩と胡林翼

曾國藩は、「胡林翼より1歳年長だったが、胡林翼より及第が2年遅かったので翰林に遅れて入り、きまりで後輩となった。しかし、仕途は胡林翼の大変動〔大起大落〕とは異なり、上昇の一途〔一路上場〕だった（中略）二人には、深いつきあいはなかった」*200と呉久民氏は述べる。朱東安氏も、「曾國藩は穆彰阿の門生、胡林翼は林則徐に比較的近かったので、多年、ごく浅いつきあい〔一面之交〕はあったが、往来は少なかった」（朱東安『曾國藩伝』

98-99頁)と言う。道光21年7月14日の曾国藩の日記に、父・胡達源の喪で胡林翼が帰郷したさいの記述がある。「胡潤芝のところに行き、棺とともに帰葬することを慰問する [問]。胡は私に『陶文毅全集』を2部くれた」*201。すぐあとで述べるように、曾国藩は陶澍に好感を持っていなかったようなので、この贈り物には鼻白む思いをしたのではないだろうか。

道光27年には、胡林翼が貴州知府を捐納したことについて、友人の陳源兗と郭嵩燾に、曾国藩は次のように書き送っている。翰林院編修だった陳源兗*202は道光25年に江西省吉安府の知府に任命され、おそらく道光27年に江西省広信府に異動した。「胡咏芝が都に来て、小珊〔鄭敦謹〕のところ泊まっている。陝西捐輸で、貴州知府に1万両あまりも捐納する。囊中の1銭も費やさず、一声かければ雲の如く集まる [一呼雲集]。その才智はまことに及ぶものではないが、光 [光芒] はやはりおのずと明らかとなる [透露] もので、おそらくくじけるだろう [缺折]。(中略) 胡は世間によって光る [以世態生光] が、君〔陳源兗〕は気節によって光るのだ [以気節生芒]。源は異なり、それが人に嫌われる [忌] 一因である」*203と、軽い悪意を洩らしている。曾国藩は胡林翼に「官界の習気」*204を感じていたのではないだろうか。

曾国藩は、陶家と相性が良くなかった。陶家が団練の寄付を出し渋ったので、曾国藩は咸豊4年1月、郭嵩燾にあてた手紙で、「陶文毅〔陶澍〕の宦囊〔官吏になって在職中に貯めた金〕は、天下の口を掩うことができようか。道光15年には私は都にいたが、彼が5万両近く人に贈る [別敬] のを送るのを見たとし、〔道光〕23年には私は陝西にいたが、(中略) 塩務の公金、銀数万両をすべて懐に収めたのを知っている」と古い話を持ち出して、「今、一文も出さない [一毛不拔] というのは実に許せることではない [実非人情之平]」*205と憤っている。咸豊3年に曾国藩が陶家に団練のため寄付させようとしたとき、阻止したのは左宗棠であった*206と後年、曾国藩の幕僚・趙烈文は記している。もっとも、陶枕を保護する側からすれば、曾国藩も「弧弱をだまそうとする者」の一人に映ったかもしれない。

貴州での活躍を知った曾国藩は胡林翼に対する認識を改めた。まさに「三日会わざれば刮目して見よ」といった気持ちであっただろう。曾国藩は、咸豊3年正月に胡林翼に手紙を書いて、母の喪に手紙と香典をくれたことに感謝し、12月21日に省都・長沙に着き、日々、張亮基、江忠源、左宗棠の三人と、「貴下の大才と遠大な抱負 [鴻才偉抱] は、今日の激動 [滔滔] を救うに足ると称えない日はありません」、今日の急務は土匪の肅清だが、「貴下は強暴な者を除くのに余力を残さないと聞いています。それに倣いたい [伐柯之則]」と思っっています。もし方略をお教えくださり、やり方 [成法] をお示しくださいませ、実にありがたいです」*207と述べている。咸豊4年1月24日、呉文鎔の死をまだ知らない曾国藩は、「胡咏之先輩が貴州から勇500-600を率いて湖北〔鄂〕に向かっています。もう黄州に着いたと思います。甄師〔呉文鎔〕は、この助けを得て、あるいは戦敗に至らないかもしれません」*208と希望をつないでいた。

だが、呉文鎔は咸豊4年1月15日に堵城で自尽してしまっていた(『日誌』298頁)。行き場を失った胡林翼は、曾国藩に助けを求めることになる。この間の事情を、胡林翼の年譜は

次のように記している。

己未〔咸豊4年1月19日〕に籐洲〔湖北省武昌府嘉魚県籐洲鎮〕まで行き、呉文節文鎔〔呉文鎔〕が黃州で戦死し、賊は漢口に向かっていると聞いた。湖北按察使・唐公樹義〔唐樹義〕が金口で水軍を治めていたので、そこに行き合流したが、公は、唐軍に規律がないのを見て、速やかに船に移り、上流に行った。癸亥〔咸豊4年1月23日〕、唐公は軍が敗れ崩れ〔潰〕、心を決めて〔発憤〕水に身を投げた。公は行ってその葬儀をしてやり、舟を雇って、その息子に棺を守って貴州に帰らせた。(中略)2月、公は貴東道を補授された*²⁰⁹。

先述のように、唐樹義とは前年(咸豊3年)に鎮遠で親交を深めたばかりであった。「貴東道」は、胡林翼が振り切るようにして逃げ出した官職である。もし貴州省を離れていなければ、胡林翼は任地の古州で朽ち果てていたかもしれない。曾国藩は、咸豊4年1月16日に駱秉章にあてて、「咏芝先輩から手紙が来て、省で天幕などを申請していると言ひ、数件、私に多く持ってきてもらいたいと頼んでいる。これは実に反乱平定の才〔戡乱之才〕だが、手紙によると貴州の上役や同僚に容れられないようである。どうしてか、わからない」*²¹⁰と書いている。呉久民氏の表現を借りれば、曾国藩は「胡林翼の手紙を受け取り、望外の喜びだった。自分に今最も乏しいのは胡林翼のような有能な人〔幹才〕だし、以前は渴望したが、得ようとしても、ほとんど可能性がなかったものが、今なんと天から降ってきたのだ」*²¹¹。

曾国藩は、咸豊4年2月15日、次のように上奏している。

該員〔胡林翼〕の募った黔勇は山民で水戦に慣れておらず、また軍費〔餉〕も人夫も火薬・鍋・天幕もなく、前進することができません。該員は湖南撫臣〔湖南巡撫。駱秉章〕と臣の軍営に申請し、食糧と武器を支給してくれるよう願っています。臣は撫臣と手紙で相談し、人員を派遣して火薬・天幕と銀2千両を送り、援助に充てることにしました。以前は、まず陸勇を送って該員と合流して湖北〔鄂〕を応援するつもりでしたが、賊匪が岳州・湘陰を擾乱し、道が阻隔され、委員は引き返しました。岳州一帯はすでに賊によって乱されています。まず岳州を占領〔攻克〕し、南北〔の道〕を通じて、はじめて全軍が東下できると臣は考えます。該員にはしばらく岳州附近に駐留するよう命じたいと思います*²¹²。

胡林翼の年譜は、曾国藩は胡林翼を「密かに上奏して推薦し〔密疏論薦〕、その才は臣の10倍、その力をかりて賊を平らげることができると述べた」と伝えるが、「この上奏文は散逸しており、瀝陳撫臣勲績摺のなかに略見するのみ」*²¹³という。

塔齊布一人で東征の軍を率いることはできないと考えた*²¹⁴曾国藩は、胡林翼と、塔齊布・羅沢南とがそれぞれ一軍を率いて東征することを計画していた。咸豊4年6月2日、武昌が

太平軍によって占領され、同月、胡林翼は四川按察使になった*215。咸豊4年閏7月9日、曾国藩は次のように上奏して、胡林翼を湖南に留めずに東征させることを願った。

この臬司〔按察使。胡林翼〕は比類なき胆力と見識をもち、威光と人望は夙に有名です。率いる黔勇600名あまりは、以前に貴州黎平府で訓練されており、しばしば戦功を挙げています。本年、崇陽・通城〔いずれも湖北省武昌府に属する県〕の匪、安化〔湖南省長沙府安化县〕の土匪を討伐し、〔湖南省〕常德府城を回収〔収復〕し、行ったところで全て民の望みを満たしています。この臬司を、湖南の軍営に留めて防衛・討伐に当たらせるようにとの論旨を奉じましたが（中略）〔湖〕南省には現在賊の足跡がなく、臣らはまさに出境して賊を討とうとしています。この臬司は才大細心で、軍中に絶対に欠くことのできない人員です。この臬司に、黔勇を率い、他の路の兵・勇も与えて一隊をつくり、臣らとともに東征させてくだされば、大局に必ず役立つと勅命を奏請いたしません*216。

咸豊4年閏7月20日、胡林翼は「塔齐布らとともに湖北に行くように、岳州に留まる必要はない」*217という上諭が出た。だが、湖南巡撫・駱秉章が、湖南の良将・勁卒は半ば以上が遠くに出かけ、湖南は危険で心配だと言って奏留したので、胡林翼はなお岳州を防衛することになった*218。胡林翼は、いつも「奏留」されてしまう。

咸豊4年8月23日に武昌を奪還*219した曾国藩は、9月22日に堵城に行って呉文鎔の霊を祭った。そして9月27日に上奏して、呉文鎔の名誉を守るために力説し、呉文鎔を陥れた崇綸の罪を糾弾した（「焦灼」26-27頁）。一方、胡林翼は咸豊4年8月2日に四川按察使から湖北按察使に異動した（『日誌』340頁）。胡林翼は「〔湖北〕省城に入り駐留した。城は戦災を経て、民富は衰微していた〔民物凋耗〕」、そして「巡撫・陶恩培は軍事を総督・楊霈に任せ、〔楊〕霈は広済〔湖北省黄州府広済県〕に駐屯すると称して来ない。公はその間で身動きがとれず〔羈絆〕、鬱々としてなすところがなかった」が、湖口（江西省九江府湖口県）で苦戦していた曾国藩が、「兵・勇2千人を率いて応援にくるよう公を奏調した」*220。咸豊4年12月、胡林翼は軍を率いて咸寧（湖北省武昌府咸寧県）から東に進み、瑞昌（江西省九江府瑞昌県）に出て、羅沢南の軍と合流し、ともに湖口を攻めた*221。

おわりに

曾国藩も胡林翼も、呉文鎔を救うことはできなかった。だが曾国藩は武昌を奪還して、呉文鎔の無念を晴らした。胡林翼は呉文鎔のおかげで貴州省から抜け出して、太平軍との戦いの主戦場に立つことができた。曾国藩と胡林翼は呉文鎔が遺した、得がたい人材であった。曾国藩と胡林翼はその遺志を継ぎ、太平軍との戦いで奮闘することになる。

- *1 浅沼かおり「咸豊3年の焦灼－曾国藩の水師建設」『共立国際研究』第41号、2024年3月。以下、「焦灼」と略記する。
- *2 趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、2003年、巻396、11789頁。以下、「清史稿」と略記する。
- *3 黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」黎庶昌、王定安等編撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜（附事略・榮哀祿）』岳麓書社、2017年、巻1、7頁。以下、黎庶昌撰「曾国藩年譜」と略記する。
- *4 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻2、32頁。呉養原編『呉文節公（文鎔）遺集』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第34集、文海出版社）に、曾国藩にあてたこの手紙も、胡林翼を奏調した上奏文（本稿注192参照）も、見つけることができなかつたが、頁の欠落もあり、それによる面もあるかもしれない。
- *5 郭廷以『太平天国史事日誌』台湾商務印書館、中華民國65年、300、306-307、309頁。以下、『日誌』と略記する。
- *6 「鄒國彪陣亡請恤片」（咸豊4年3月20日）『曾国藩全集』岳麓書社、1995年、奏稿（一）122-123頁。以下、『曾国藩全集』について「岳麓書社、1995年」は省略する。
- *7 「探明前路賊踪片」（咸豊4年3月20日）『曾国藩全集』奏稿（一）124頁。
- *8 「岳州復失水勇退回長沙防剿摺」（咸豊4年3月15日）『曾国藩全集』奏稿（一）119頁。
- *9 「岳州戰敗自請治罪摺」（咸豊4年3月20日）『曾国藩全集』奏稿（一）122頁。
- *10 「稟父」（咸豊4年3月25日巳刻）『曾国藩全集』家書（一）247頁。
- *11 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、38頁。
- *12 「逆匪上竄靖港寧鄉截剿獲勝摺」（咸豊4年2月23日）『曾国藩全集』奏稿（一）107頁。『日誌』314頁。
- *13 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、38頁。
- *14 「会奏湘潭靖港水陸勝負情形摺」（咸豊4年4月12日）『曾国藩全集』奏稿（一）132-133頁。
- *15 王闓運（1833-1916）、字は壬甫・壬秋、号は湘綺、湖南省長沙府湘潭県人、咸豊7年の挙人、曾国藩の湘軍で計畫〔擘画〕に参加した（澹泊主編『中国名人志』第12巻、清朝（下）、中国檔案出版社、2001年、1645頁）。
- *16 朱東安『曾国藩伝』百花文芸出版社、2000年、102-103頁。以下、朱東安『曾国藩伝』と略記する。銅官での一件については、長沙章氏輯『銅官感旧集』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第43集、文海出版社）を参照。
- *17 曾国藩は「自分の平生『五大恥辱』の首」（張宏傑・陳準等『曾国藩的友人与敵人』（第1章・葉星「雷霆雨露皆春風－曾国藩与李元度」）國際文化出版公司、2014年、13頁）とした。以下、この書籍を張宏傑・陳準等『曾国藩的友人与敵人』と略記する
- *18 「靖港敗潰自請治罪摺」（附遺摺遺片）（咸豊4年4月12日）『曾国藩全集』奏稿（一）137-139頁。
- *19 「靖港敗潰後未発之遺摺遺片」（脚注1）『曾国藩全集』奏稿（一）139頁。
- *20 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、38頁。弟たちへの手紙には、「いま兄はすでに妙高峰に移居し、数百の陸勇に護衛されている」（「致澄弟温弟沅弟」（咸豊4年4月初4夜）『曾国藩全集』家書（一）250頁）と書かれている。
- *21 「未発之遺摺」『曾国藩全集』奏稿（一）139-140頁。
- *22 「未発之遺片」『曾国藩全集』奏稿（一）141頁。
- *23 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、38頁。
- *24 「致澄弟温弟沅弟」（咸豊4年4月初4夜）『曾国藩全集』家書（一）249頁。

- *25 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、39頁。
- *26 塔齊布については、「焦灼」11頁を参照。
- *27 「恭謝天恩曲貸前愆復勉後効摺」（咸豊4年5月初8日）『曾国藩全集』奏稿（一）142-143頁。
- *28 李榕（?-1889）、原名は甲先、字は申夫、四川省保寧府劍州人、咸豊進士、咸豊年間に曾国藩に従って営務を辦理した。江西、安徽などの地を転戦し、官は湖南布政使に至った（孫文良・董守義主編『清史稿辞典』山東教育出版社、2008年、731頁）。以下、『清史稿辞典』と略記する。
- *29 「致沅弟」（同治5年12月18夜）『曾国藩全集』家書（二）1309頁。
- *30 侑生は、侑舞生、樂舞生ともいう。清代に孔廟で祭祀をおこなった樂舞人員。通常、学政が入学させない〔不録取入学〕童生から選ばれた（朱金甫・張書才主編、李国栄副主編『清代典章制度辞典』中国人民大学出版社、2011年、386頁）。以下、『典章』と略記する。
- *31 「致沅弟」（同治6年3月12日）『曾国藩全集』家書（二）1330頁。
- *32 「靖港敗潰自請治罪摺」（附遺摺遺片）（咸豊4年4月12日）『曾国藩全集』奏稿（一）137-138頁。
- *33 「致澄弟温弟沅弟」（咸豊4年4月初4夜）『曾国藩全集』家書（一）250頁。
- *34 「致澄弟温弟沅弟季弟」（咸豊4年4月20日午刻）『曾国藩全集』家書（一）253頁。
- *35 朱東安『曾国藩伝』104-105頁。
- *36 「請催広東統解洋炮片」（咸豊4年7月11日）『曾国藩全集』奏稿（一）161頁。
- *37 「致澄弟温弟沅弟季弟」（咸豊4年6月初2日）『曾国藩全集』家書（一）261頁。
- *38 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻3、40頁。
- *39 『清史稿辞典』1238頁。喬暁軍編『清代翰林伝略』陝西旅游出版社、2002年、305頁。以下、『翰林』と略記する。梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第18輯、文海出版社、第1巻、5（一）頁には、「諱・林翼、字・旼生、一字・潤芝」と記されている。以下、梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』と略記する。なお、一般に、人物の生没年や字などは、史料・辞典によって、しばしば異同がある。胡林翼をみごもった〔震〕とき、母の湯氏が次のような夢をみた。五色の鳥が家の後ろの林に集まってきて、両翼を広げて飛び鳴き、群鳥がこれに従い、飛びながら、林のなかのヒジリダケ〔芝草〕をついばんで、うろうろして去らなかつた。そこで祖父の郷賢公が林翼と命名し、号を詠芝とした（巖樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第8輯、文海出版社、256（二）頁）。以下、巖樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』と略記する。巖樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』と、その付録として同じく沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』（第8輯、文海出版社）に収められている郭嵩燾「胡文忠公行状」とは、梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』のなかで、前者は「巖氏樹森撰公年譜」、後者は「郭氏行状」と表記され、史料として活用されている。
- *40 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、10（三）頁。
- *41 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、5-7（一-二）頁。
- *42 捫虱談虎客輯、張国寧・李晋林点校『近世中国秘史』山西古籍出版社・山西教育出版社、1999年、169頁。
- *43 「徐凌霄、原名は仁錦、字は雲甫、齋名は凌霄漢閣。1886年9月19日に生まれた。知名な仕宦家庭の出身で、祖籍は江蘇宜興である」（「徐凌霄其人」徐凌霄・徐一士著、徐沢昱・徐禾整理『凌霄漢閣談薈 曾胡談薈』中華書局、2021年、1頁）。以下、『凌霄漢閣談薈 曾胡談薈』と略記する。
- *44 「国藩治学不株守宋儒門戸」（曾胡談薈）『凌霄漢閣談薈 曾胡談薈』402頁。
- *45 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2巻、116（十三）頁、咸豊5年9月に妻の静娟夫人にあてた手紙だという。この手紙のように、胡遂・鄧立勳・胡漸遠整理標点、唐浩明責任編輯『胡林翼集』（全5冊、岳麓書社、1999年）には収録されていないが、年譜に記載されている手紙が数多くある。以下、

- 『胡林翼集』と略記する。
- *46 「後記：胡林翼研究資料六題」陶海洋『胡林翼与湘軍』広陵書社、2008年、204頁。以下、陶海洋『胡林翼与湘軍』と略記する。『胡文忠公遺集』については、「このたび整理した胡氏の奏疏は、清・同治6年6月〔季夏〕、鄭敦謹、曾國荃が編輯した『胡文忠公遺集』黄鶴樓刻本を底本にしている」（『胡林翼集』編校説明、1頁）と説明されている。『胡文忠公遺集』（10巻、8冊。同治元年武昌初刻、同治5年重刊）は省略が多かったため、同治6年に武昌刻『胡文忠公遺集』（86巻、32冊）ができた、『胡林翼集』（5冊。岳麓書社編、1999年）は主に同治6年の版本に拠っている（陶海洋『胡林翼与湘軍』199-200頁）。
- *47 于蔭霖編『棟齋日記』（おそらく光緒19年2月）沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第23輯、文海出版社、905頁、巻3（十四頁）。
- *48 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、11（四）頁。
- *49 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、12（四）頁。
- *50 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第6章・吳久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）257頁。
- *51 黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻1、3頁。
- *52 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第2章・陳準「德星聚処是三人－曾國藩与劉蓉、郭嵩燾」）79頁。
- *53 黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻1、4頁。
- *54 『清史稿辞典』1900頁。『翰林』227頁。錢実甫編『清代職官年表』中華書局、1997年、1457-1462頁。以下、『職官』と略記する。佐伯富『清代塩政の研究』（第2版）東洋史研究会、1962年、第7章も参照。
- *55 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第2章・陳準「德星聚処是三人－曾國藩与劉蓉、郭嵩燾」）84頁。
- *56 北京時代の曾國藩については、拙稿「京官時代の曾國藩」『共立国際研究』（第40号、2023年3月）で論じた。以下、「京官」と略記する。
- *57 新郎の方から使者をやって新婦の名を尋ねる儀式で、新婦側からは名前や嫡庶の別や生年月日などを書いたものを渡した。
- *58 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、13-14（五）頁。嚴樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』258（四）頁。許喬林編『陶文毅公（澍）集』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』（第29輯、文海出版社）所収の「遺詔」に「授川東兵備道」（巻30、奏疏、告病・遺詔、2395（八）頁）、「益陽胡氏族譜序」に「嘉慶己卯〔24年〕秋余赴官川東便道歸里過姻丈胡律臣先生於益陽志局」（巻38、文集、序、2871（十九）頁）と記されている。陶澍は嘉慶25年に川東道から山西按察使になっている（『職官』2125頁）。
- *59 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、14（五）頁。郭嵩燾「胡文忠公行状」（本稿注39参照）313（一）頁。
- *60 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、17（七）頁。
- *61 「呈叔父達澍公」（道光8年10月12日）『胡林翼集』第2冊、家書、1020頁。
- *62 「呈七叔墨溪公」（道光8年10月23日）『胡林翼集』第2冊、家書、1020頁。
- *63 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、18（七）頁。「陶家の富を知らない者があろうか。益陽の土地からは毎年3万石が上がる」（「復駱乘章」（咸豐4年正月23日）『曾國藩全集』書信（一）477頁）という曾國藩の手紙から、陶家は益陽に土地を所有していたことがわかる。
- *64 「呈七叔墨溪公」（道光9年9月16日）『胡林翼集』第2冊、家書、1021頁。

- *65 「呈七叔墨溪公」（道光10年2月初4日）『胡林翼集』第2冊、家書、1022頁。
- *66 「年代不詳」だが、胡林翼の陶澍あての手紙には、学問に励む様子を知らせて、「援助をお願いします。年内の費用を私〔子婿〕のために厚くしていただければ有り難いです」（「呈岳父陶澍」『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1104頁）と、「おねだり」している様子が見える。また後年、胡林翼は「私〔女婿〕は過門して20年あまりになります」（「呈岳父陶澍之楊盧二妾」（10月初5日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1120頁）と書いている。「過門」という言葉は「興入れ」を意味するが、入贅にも使われたことがわかる。滋賀秀三『中国家族法の原理』（創文社、1967年）には婚姻についての有益な指摘が多くある。通常の「結婚の主要な儀式はすべて男家において行われる」（同書、474頁）のと入贅婚との違いは顕著である。入贅婚については、同書第6章第3節の「一招婿（贅婿）」も参照。とくに湖北省竹谿県の報告として、「財産あり子もある者の招婿入贅〔むことりむこいり、とるびがふられている〕とは、女家の父母がむすめを愛する情深く、ひいては婿をも愛するがために行われるものであり、将来財産について贅婿もいくらか分け前に与ることができる。必ずしも妻方に姓を改めるわけではない」という一節を挙げて、「贅婿とは本質的には義子に外ならないことを知る手がかりとして、右の事実は注目さるべきである」（同書、611-612頁）と述べられているのは、胡林翼と陶澍の関係にもあてはまるかもしれない興味深い。
- *67 「呈父達源公」（道光10年9月初3日）『胡林翼集』第2冊、家書、1022頁。
- *68 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、13（五）頁。
- *69 「陶澍以女妻胡林翼」（1935年11月8日、原『国聞周報』第12巻第45期）徐凌霄・徐一士著、徐澂昱編輯、劉悦斌・韓策校訂『凌霄一士隨筆』中華書局、2022年、1261-1262頁。以下、『凌霄一士隨筆』（中華書局、2022年）と略記する。
- *70 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、22-23（九-十）頁。
- *71 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、23（十）頁。
- *72 「呈父達源公」（道光12年5月初2日）『胡林翼集』第2冊、家書、1024頁。
- *73 「呈父達源公」（道光12年5月28日）『胡林翼集』第2冊、家書、1025頁。
- *74 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、24-25（十-十一）頁。
- *75 「致保弟楓弟」（道光13年10月初8日）『胡林翼集』第2冊、家書、1028-1029頁。
- *76 「致保弟」（道光14年2月14日）『胡林翼集』第2冊、家書、1030頁。
- *77 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、25（十一）頁。
- *78 『清史稿辞典』407頁。羅正鈞著、朱悦・朱子南校点、辺仲仁責任編輯『左宗棠年譜』岳麓書社、1983年、巻1、10頁。以下、羅正鈞『左宗棠年譜』と略記する。
- *79 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、25（十一）頁。
- *80 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、26（十一）頁。道光14年に翰林院侍読（従五品）となる（同書、第1巻、27（十二）頁）。
- *81 呉鍾駿（1798-1853）、字は耽声・崧甫、号は晴舫、江蘇省蘇州府吳县人、道光12年状元、修撰となる。福建・湖南の主考官を歴任し、福建・浙江の学政をつとめ、国子監祭酒、詹事府詹事、内閣学士、殿試読卷官、礼部左侍郎をつとめた。咸豊3年に病気で免職となる（『翰林』290頁）。『清史稿辞典』（806頁）では没年が1843年（道光23年にあたる）とされているが、咸豊3年に礼部左侍郎を病免されている（『職官』685頁）ので、呉鍾駿についての説明は『翰林』の記述による。
- *82 但文恭については不詳であるが、後年、湖南省永綏直隸庁同知を務めている（後述）。
- *83 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、27-28（十二）頁。
- *84 王植（1792-1852）、字は叔培、号は曉林、自号は秉燭老人、直隸省保定府清苑県人、嘉慶22年進士、庶吉士、散館後編修となる。道光13年、侍講、大理寺少卿となり、内閣学士に拔擢される。のち

- に礼部侍郎、刑部侍郎、浙江巡撫、安徽巡撫、江西巡撫代理を歴任する（『清史稿辞典』137頁。『翰林』261-262頁）。
- *85 吳傑（?-1836）、字は梅梁、浙江省紹興府会稽県人、はじめ浙江省杭州府昌化県の教諭となる。嘉慶19年の進士、庶吉士、散館後編修、御史、道光2年、四川学政となる。給事中となり、貴州按察使、順天府丞、内閣学士、工部侍郎を歴任した（『清史稿辞典』790頁。『翰林』256頁）。
- *86 王鼎（1768-1842）、字は定九、陝西省同州府蒲城縣人、嘉慶元年進士、庶吉士、散館後編修となり、官は左都御史に至る。道光2年に軍機大臣、翌年に戸部尚書、18年に東閣大学士となる。アヘン戦争のとき、林則徐のために極力争い、穆彰阿が国を誤ったと弾劾し、「屍諫」した（『清史稿辞典』138頁。『翰林』211頁）。
- *87 潘世恩（1769-1854）、字は槐堂、号は芝軒、江蘇省蘇州府吳県人、乾隆58年状元、和珅におもねらず、抑えられた。工部、戸部、吏部尚書を歴任、道光13年に軍機大臣となる。東閣大学士、ついで武英殿大学士、太傅に至る。咸豊朝に上奏して、林則徐を封疆に任ずるよう推薦した。咸豊4年に亡くなる。諡は文恭である（『清史稿辞典』2549頁。『翰林』206頁）。孫の潘祖蔭（1830-1890）は道光28年に潘世恩の80歳の寿によって挙人とされ、咸豊2年に一甲三名進士となり、翰林院編修となった（『清史稿辞典』2550頁。『翰林』339頁）。
- *88 宜崇、またの名を伊崇額、字は昇庵、満洲鑲黄旗人、嘉慶24年の進士、「特授改補館職」、吏部主事、員外郎となる。道光16年、会試同考官、左中允になる。侍講学士、詹事、大理寺卿を歴任、咸豊11年に免職となる（『翰林』474頁）。「特授」とは、皇帝の特旨により任命された官員である（『典章』582頁）。
- *89 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、29-30（十三）頁。
- *90 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、31（十四）頁。
- *91 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、32（十四）頁。
- *92 慧成（?-1864）、字は秋谷、号は裕亭、戴佳氏、満洲鑲黄旗人、道光16年の進士、庶吉士、散館後檢討となる。侍郎、総督などを歴任した（『清史稿辞典』2435頁。『翰林』307頁）。
- *93 「呈岳父陶鈔」（29日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1107-1108頁。前掲、許喬林編『陶文毅公（澍）集』の「卷30、奏疏、告病・遺摺」も参照。
- *94 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、32-33（十四-十五）頁。
- *95 賀熙齡（1788-1846）、字は光甫、号は蔗農、湖南省長沙府善化县人、嘉慶19年の進士、庶吉士、散館後編修となる。四川道御史、会試同考官、湖北学政、台湾知府などをつとめた。賀長齡の弟である（『翰林』257頁）。
- *96 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、37（十七）頁。
- *97 貴州時代にも、「小淹に戻ると知った。日夜おまえを心配して止まない。小淹の人心は昔と違う、家に帰ると聞いて一層心配だ。（中略）おまえと家族全員を貴州に迎えたいが、在官の身で朝夕駆け回り、もともと一定の方向がない」（「致内弟陶少雲」（10月初5日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1119頁）と陶枕を心配している。さらに胡林翼は、養子・賜福と陶枕の娘との縁談を望んでいる。岳母に宛てて、「少雲〔陶枕の字〕には幼い娘がいると聞きます。八字〔生まれた年・月・日・時を干支で書いたもの。縁談のとき交換して相性をみる〕を来合させていただきたいです。もしさらに一代婚姻できれば、（中略）実に願ってもないこと〔至願〕です」（「呈岳母陶太夫人」（11月13日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1113頁）。
- *98 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、6（一）、30-32（十三-十四）頁。
- *99 陶澍は病免となってまもなく亡くなったので、在官で亡くなるのと大差ないと思われる。服部宇之吉氏によると、横流しなどで出た欠損金はふつう後任者に引き継がれたが、在職中に死ぬと「屍尾

が出るから」危険であった（服部宇之吉「支那研究」（『清国通考』三省堂書店、1966年、73-74頁）。

- *100 盧坤（1772-1835）、字は静之、号は厚山、直隸省順天府涿州人、嘉慶4年の進士、庶吉士、散館後兵部主事となる。道光12年に湖広総督から兩広総督に転じ、道光15年に在職のまま亡くなった（『清史稿辞典』2589頁。『翰林』219頁。『職官』1458-1460頁）。
- *101 「呈岳母及岳父陶澍之妾」（12月20日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1113-1115頁。「この手紙は陶澍が亡くなった1839年に書かれたようだ」（1113頁）と注記されている。
- *102 羅正鈞『左宗棠年譜』巻1、14-15、19、24頁。
- *103 張宏傑・陳準等『曾國藩の友人与敵人』（第6章・吳久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）254頁。
- *104 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、33-35（十五-十六）頁。
- *105 『清史稿辞典』316頁。『翰林』277頁。
- *106 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、26（十一）頁。この家書は、『胡林翼集』には見当たらない。
- *107 朱東安『曾國藩』97頁。「降級留用」には降一級から降三級まで、「降級調用」には降一級から降五級までがあった（郭松義等『清朝典章制度』吉林文史出版社、2001年、257頁）。『典章』93頁、『清会典事例』中華書局、1991年、吏部二、官制、巻18、237、239頁も参照。
- *108 「張二陵談文慶与胡林翼降級事」（附：光緒帝継統秘聞）『凌霄一士隨筆』（中華書局、2022年）313頁。原載は『国聞周報』第7巻第26期、1930年7月7日。
- *109 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、35（十六）頁。
- *110 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、36（十六）頁。
- *111 明清期、挙人合格者が郷試主考官を、進士が会試総裁官を、「座師」（あるいは「座主」）と呼んだ（『典章』591頁）。
- *112 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、36（十六）、38-39（十七-十八）頁。
- *113 「同治年間に、陶夫人が公の志を承けてその地〔紫筠園〕を広げて〔拓〕、郷賢祠を建て、田を買い書を蔵し、紫筠義塾とした」（梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、39（十八）頁）という年譜の記述からは、陶夫人の人格が偲ばれる。胡林翼は教育を重視していた（「義学を設けるのは、とりわけ私の意にならなっている。およそ人生で最もつらいのは、学びたいのにそれができないことだ。（中略）我が家は郷賢公以下、読書の奨励に力を尽くさないものはなかった」（「致懿弟」（道光29年正月12日）『胡林翼集』第2冊、家書、1049頁）。
- *114 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、39-40（十八）頁。
- *115 「致族兄君儒」（咸豐元年5月18日）『胡林翼集』第2冊、家書、1059頁。もっとも故郷には故郷の苦勞があったようで、「我が家は族が集まって暮らし、仲違いはない。骨肉和睦、嬉しい限りだ。しかしおまえが中にならないうちで維持する苦勞もまたわかる。私は他郷で寂しく、家族の楽しさを思うが、同居の難も想像がつく〔聯想〕」（「致楓弟等」（道光29年8月初6日）『胡林翼集』第2冊、家書、1052-1053頁）。
- *116 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、41（十九）頁。
- *117 但明倫、字は天叙、号は敦五・雲湖、貴州省貴陽府広順州人、嘉慶24年進士、庶吉士、散館後編修、御史となる。道光元年に湖南副考官、3年に会試同考官、8年に浙江副考官、官は兩淮塩運使に至る（『清史稿辞典』831頁。『翰林』266頁）。
- *118 清代の官員が罪を得て降革された場合、銀錢を捐納して原職を恢復することができ、それを「捐復」と称した（『典章』564頁）。
- *119 林則徐（1785-1850）、字は少穆・元撫、晩号は堃村老人、福建省福州府侯官県人、嘉慶16年の進士、

庶吉士、散館後編修となる。道光11年に河東河道総督、翌年に江蘇巡撫、17年に湖広総督になる。欽差大臣として広東でアヘン禁止にあたり、外国商人のアヘン2万箱あまりを廃棄した。20年、両広総督となる、アヘン戦争が起きる。革職となり、21年、伊犁に遣戍となる。25年、召還起用、陝甘総督、陝西巡撫、雲貴総督を歴任した。30年、再び欽差大臣となり、督理軍務のため広西に向かったが、赴任途中で病死した（『清史稿辞典』940頁。『翰林』250頁）。

- * 120 陸建瀛 (1792-1853)、字は立夫・仲白、湖北省漢陽府沔陽県人、道光2年進士、庶吉士、散館後編修となる。侍講、侍読、直隸天津道、布政使を歴任した。道光26年、雲南巡撫に抜擢、雲貴総督を兼署した。江蘇巡撫に転じ、29年には両江総督になる。咸豊3年、欽差大臣となり、軍を率いて九江に行き、太平軍をせき止めようとした。潰敗後、南京に逃げ戻り、革職となった。太平軍が南京を占領したとき殺された（『清史稿辞典』1863頁。『翰林』276頁）。陶澍の塩政改革の方針は、道光29年に両江総督となった陸建瀛によって継承された（前掲、佐伯富『清代塩政の研究』385頁）。
- * 121 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、43（二十）頁。「12月9日、公は親戚知人を宴に招いた。酔いがまわると悲憤慷慨して志を述べた。客はみな出馬を勧めた。そこでやっと出山を決めた」（嚴樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』267-268（一三一四）頁）。
- * 122 鄭敦謹 (1802-1885)、字は叔厚、号は小山・松峰、湖南省長沙府長沙県人、道光15年の進士、庶吉士、散館後刑部主事となる。官は左都御史、工部尚書、兵部尚書、総署大臣にのぼる。官職にあって清節をもって知られる（『翰林』300頁）。『清史稿辞典』（2542頁）にも記載があるが、『翰林』に拠った。
- * 123 龍山とは湖南省永順府龍山県であろう。李如崑には曾國藩の幕府にいた時期があり、同知元年の曾國藩の日記に登場するという（李志茗『晚清四大幕府』上海人民出版社、2002年、101頁）。
- * 124 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、44-45（二十-二十一）頁。嚴樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』268（一四）頁。以下は、年代不詳だが、おそらく道光26年に北京に向けて揚州を立つ前に書かれた手紙である。「5月26日に京に向かう。母が私を想ったり、家で何かあったりしたら、すぐ帰る。ほかのところからでも道は開け [出頭]、中書・軍機でなくても良いからだ。もし家中が平穩無事なら、来年秋に軍機を受ける。家族は今年の秋冬に、みんな揚州にやる」（『致諸弟』（25日）『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1102頁）。「軍機」は「軍機章京」であろう。軍機章京は兼職で、軍機大臣が内閣中書などの官員のなかから選調した。選調するときは、あらかじめ各衙門に伝達して保証・推薦させ、軍機大臣が試験をして数名あるいは10名あまりを採用して引見させ、奉旨記名となった者は、ポストが空き次第、順に任命された（『典章』277頁）。「6月、陝西捐輸案で内閣中書を報捐し、知府に捐陞し、分發貴州補用となった。林文忠公が專摺奏辦した」（嚴樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』268（一四）頁）。
- * 125 「曾胡家世科第」（曾胡談薈）『凌霄漢閣談薈 曾胡談薈』359頁。
- * 126 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、46（二十一）頁。
- * 127 「致楓弟懿弟儀弟翼弟」（道光27年10月初8日）『胡林翼集』第2冊、家書、1037頁。
- * 128 「論貴州境插花情形啓」（道光28年）『胡林翼集』第2冊、書牘、8-9頁。
- * 129 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、47（二十二）頁。もっとも胡林翼自身は咸豊3年の手紙のなかで、「逮捕 [緝捕] のことは、幼いころから学んだことがない」（『緝捕群盜啓」（咸豊3年3月16日）『胡林翼集』第2冊、書牘、87頁）と述べているが、それはそのとおりであろう。
- * 130 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、48（二十二）頁。
- * 131 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、48-49（二十二-二十三）頁。安順府城では久しく川がつまり、山から水があふれると家が水浸しになり、雨が止むと涸れて、住民は城外を10里あまり行かないと水を汲んで飲むことができなかった。胡林翼は川をさらい、泉を掘り、ダムを築き、水

門を設けて水量を調節し、民の便をはかった（巖樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』269-270（一五-一六）頁）。

- *132 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、51（二十四）頁。
- *133 「致楓弟」（道光29年3月初5日）『胡林翼集』第2冊、家書、1049-1050頁。
- *134 「致楓弟」（道光29年閏4月初6日）『胡林翼集』第2冊、家書、1050頁。
- *135 「呈七叔墨溪公」（道光29年5月29日）『胡林翼集』第2冊、家書、1051頁。
- *136 「致喬用遷」（道光29年）『胡林翼集』第2冊、書牘、18頁。
- *137 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、54-57（二十五-二十七）頁。
- *138 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、57（二十七）頁。
- *139 「引見」とは、官員が中央の関連部院衙門に引率されて皇帝に謁見し、皇帝自身に観察〔考察〕される制度であり、文官は吏部によって引見された（『典章』133頁）。
- *140 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、57-58（二十七）頁。
- *141 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、58（二十七）頁。
- *142 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、59-60（二十八）頁。巖樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』274（二〇）頁。
- *143 「致懿弟」（咸豐元年4月初5日）『胡林翼集』第2冊、家書、1056頁。
- *144 「致黎平府多」（咸豐3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、97頁。
- *145 「嚴禁訟費示」（咸豐元年）『胡林翼集』第2冊、書牘、35頁。
- *146 「諭黎郡布種春花」（咸豐元年）『胡林翼集』第2冊、書牘、36頁。
- *147 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、60（二十八）、63（三十）頁。
- *148 「雕剿の法」は「鵬剿の法」であり、「〔傳〕籛は、苗を治めるのに専ら鵬剿法を用いた。大小百戦、用いたのは僅かに郷勇数千であった。苗人は深山絶壁を平地のごとく越え、部隊の隊列はなく、樹木の生い茂る谷間に伏して暗いところから明るいところを攻撃した。銃は鋭く長く、山の起伏にそって多くが命中した。籛は苗地なので苗技を用いて士卒を訓練し、砂を袋に入れて軽く進み、藤牌を輝かせ、狭い道では刀や槍を用いた。戦が終わるたびに厳しく淘汰し、数年かけてはじめて精卒千を得て、『飛隊』と号し、風雨にも隊列を乱さず、財産を遺す道を顧みず、甘苦を共にし、死に至ることができた」（『清史稿』巻361、11388頁）。
- *149 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、61（二十九）頁。
- *150 『清史稿辞典』864頁。『清史稿』巻516、14293頁。
- *151 『清史稿辞典』2030頁。『清史稿』巻361、11386-11390頁。
- *152 「致保弟」（咸豐元年4月14日）『胡林翼集』第2冊、家書、1057-1059頁。
- *153 「致喬用遷」（咸豐元年）『胡林翼集』第2冊、書牘、34頁。
- *154 戚繼光著、馬明達・馬廉禎点校『紀効新書』人民体育出版社、2023年、巻第1、東伍篇、原選兵、18頁。
- *155 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、68-69（三十二-三十三）頁。呂佺孫（?-1857）、字は堯仙・元相、号は蘭溪、江蘇省常州府陽湖県人（『清史稿辞典』597頁。『翰林』305-306頁）。孔慶鏞、字は稷臣、号は誠甫、山東省兗州府曲阜県人（『翰林』305頁）。
- *156 「致呂佺孫」（咸豐元年）『胡林翼集』第2冊、書牘、34-35頁。
- *157 「致楓弟」（咸豐2年3月16日）『胡林翼集』第2冊、家書、1063頁。
- *158 蔣爵遠（?-1853）、字は謙生、鑲藍旗官軍。蔣攸銛の子。道光15年進士。知府、按察使、布政使を歴任、官は貴州巡撫に至る。軍を率いて苗民起義の鎮圧にあたり、殺された（『清史稿辞典』2312頁）。『職官』1695頁。

- *159 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、67-70(三十二-三十三)頁。
- *160 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、71-73(三十四-三十五)頁。
- *161 「致程喬采(咸豊2年9月30日)『胡林翼集』第2冊、書牘、69頁。胡林翼は陶枕に、「母と妻は今も鎮遠[撫水]にいる」「致内弟陶少雲(10月初5日)〔脚注には咸豊4年に書かれたようだとあるが、咸豊2-3年ではないかと思われる。〕『胡林翼集』第2冊、家書・年代不詳、1119頁)と書いているので夫人も鎮遠にいたことがわかる。
- *162 「致曹興仁(咸豊3年)『胡林翼集』第2冊、書牘、123頁。
- *163 「粵」はふつう広東省を指すが、すぐ後にあるように広西省のことを「粵西」と書いており、文脈からみて広西とした。
- *164 「請通飭修築碉堡啓(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、63頁。
- *165 菊池秀明『金田から南京へー太平天国初期史研究ー』(汲古書院、2013年)の第3章「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」(とくに「二、永安州における包圍戦と太平軍の北上」)を参照。
- *166 「請通飭修築碉堡啓(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、62頁。
- *167 「致呂佺孫(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、48頁。胡林翼は、太平軍との戦いを注視していた。「揆帥〔揆は宰相の別称。賽尚阿(?-1875)、字は鶴汀、阿魯特氏、正藍旗蒙古。道光21年1月から、咸豊2年9月に革・戊になるまで軍機大臣。咸豊元年1月から、咸豊2年9月に革・戊になるまで文華殿大学士。太平軍との戦いのため、咸豊元年3月に湖南省に、4月に広西省に派遣された。『清史稿辞典』2702頁。『職官』102-103、148-149頁)の左右には一人のまともな人〔正人〕も、一人の献策者〔謀士〕もない。その嫉妬深く薄情冷酷で〔忌刻〕陰険なところ〔傾險〕はことごとく内務府の気習である。まことにこれと権を争ってはいけない。烏都護〔烏爾泰〕、江岷樵〔江思源〕の言葉を用いず、鍾泉〔鄒鳴鶴、字は鍾泉。咸豊元年から咸豊2年にかけて広西巡撫。『清史稿辞典』2225頁。『職官』1695-1696、3250頁)に罪をなすりつける〔誣過〕ところを見ると、手腕がないことがわかる。しばし韜晦を示し、自ら失敗するのを待つに如かずであり、失敗によってこれをなんとかする〔計〕のは今である。私見によれば、閱歴の深さにかけては仲紳〔徐広縉、字は仲深。〔深〕は〔紳〕と同音。道光28年から咸豊2年にかけて両広総督。『清史稿辞典』1551頁。『職官』1468-1470、3198頁)のようなものはいない。揆帥が一日広西を離れなければ、仲帥は一日広西のことに関わらない」(『復張亮基(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、59頁)。
- *168 「致張亮基(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、45頁。
- *169 「復張亮基(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、59-60頁。
- *170 「兵練支放操練章程(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、42頁。
- *171 「致呂佺孫(咸豊2年)『胡林翼集』第2冊、書牘、57頁。
- *172 「致呂佺孫孔慶鏞(咸豊3年)『胡林翼集』第2冊、書牘、92頁。
- *173 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、74-76(三十五-三十六)頁。
- *174 唐樹義(1793-1857)、字は子方、貴州省遵義府遵義県人、道光挙人。湖北知県から布政使に抜擢され治績があったが、病により退いた。咸豊年間に湖北按察使を起授され、太平軍と戦ってしばしば勝利したが、因事罷職、兵潰れ投江して死す(『清史稿辞典』1582頁。『職官』2157頁)。
- *175 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、81-83(三十九-四十)頁。
- *176 「諭辦瓮安榔匪啓(咸豊3年)『胡林翼集』第2冊、書牘、104頁。
- *177 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、86(四十一)頁。
- *178 梅英傑纂『胡文忠公(林翼)年譜』第1巻、87(四十二)頁。
- *179 「致周觀察(咸豊3年)『胡林翼集』第2冊、書牘、127頁。
- *180 「剿辦革盜啓(咸豊3年)『胡林翼集』第2冊、書牘、80頁。

- *181 「致左宗棠」（咸豊3年正月初2日）『胡林翼集』第2冊、書牘、78-79頁。胡林翼は謙遜しているが、思南府では「学校を興し、学資を寄付し、在任9カ月、士民は敬愛し〔愛戴〕、徳政碑を立てた」（嚴樹森編『胡文忠公（林翼）年譜』274（二〇）頁）。
- *182 王癸桂（?-1870）、字は曉珊・小山、号は笑山、直隸省保定府清苑県人、道光16年の進士、庶吉士、散館後礼部主事となる。御史時代にしばしば太平天国鎮圧について述べた（『翰林』304頁）。『清史稿辞典』（162頁）にも記載がある。
- *183 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、88-89（四十二-四十三）頁。
- *184 「辞委署東道啓」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、121-122頁。
- *185 「我が国の人士は従来身体の健康に注意せず、また頭を使い過ぎて、40歳にもならぬのに、目はかすみ〔茫茫〕、髪は白髪がまじり、齒はぐらついている。どれもみなそうである。役人の仕事に努める〔強仕〕年に、すでにこのように衰退している。一旦政權〔斧柯〕を授かったら、何をもって担うのか。私は現在健康〔衛生〕を重視している。そのやり方は、ただ一つ「動」の字である。早起きに勤めれば気分爽快、運動に勤めれば筋骨は丈夫になる」（「致保弟」（道光13年4月17日）『胡林翼集』第2冊、家書、1026頁）。「我が家はもともと儉約質素をたつとび、祖父は在りしとき、古稀になろうというのに喜んで歩き、かご〔肩輿〕に乗ろうとはしなかった。父も常に筋骨を勞し、過食をせず、遊び楽しむことはしなかった。われら兄弟数人は（中略）体質は壮健で、年も壮年、どうして自暴自棄になって体を放埒にして良いものだろうか」（「致楓弟驚弟」（道光28年4月14日）『胡林翼集』第2冊、家書、1040頁）。
- *186 「致周觀察」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、127頁。
- *187 「致呂佺孫」（咸豊2年）『胡林翼集』第2冊、書牘、48-49頁。
- *188 父・胡達源は借金を戒めていた。胡林翼によれば、「およそ親戚友人のあいだでもっともいきちがい〔齟齬〕が生じやすいのが、債務である。昔、亡父〔先君〕が私に教えた、『衣食は節約できる。つねに手元に余裕を持たせるのが最も良いが、飢寒を忍ぼうとも借金はするな。債務があるのは骨疽ができたようなもので、本当に命取りになる。もし親戚友人がたまたま窮乏して借金を頼んできたら、力のおよぶかぎり快く与えよ。他日、返せるのなら受け取ってもよい。返さなければ、催促するに及ばない。親戚友人の交わりが終わりを全うしない場合の大半は債務のもめ事によるのだ。』私はいつもしっかり記憶して変わらない」（「致楓弟」（道光30年5月17日）『胡林翼集』第2冊、家書、1055頁）。
- *189 「致呂佺孫孔慶鋤」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、125頁。
- *190 「致曹興仁」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、123-124頁。
- *191 「致翟誥」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、84-85頁。
- *192 『日誌』294頁。呉文鎔が胡林翼を奏調した上奏文は、まだ見つけることができていない。
- *193 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、89（四十三）頁。
- *194 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第6章・呉久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）260頁。
- *195 朱保炯・謝沛霖『明清進士題名碑録索引』上海古籍出版社、2004年、2775頁。『翰林』265-266頁。
- *196 「陳辦榔匪情形啓四則」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、102頁。
- *197 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第1巻、89（四十三）頁。
- *198 「致但文恭二則」（咸豊3年）『胡林翼集』第2冊、書牘、128頁。
- *199 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2巻、91（一）頁。
- *200 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第6章・呉久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）258頁。
- *201 『曾國藩全集』日記（一）道光21年7月14日、91-92頁。

- *202 陳源充については、「京官」を参照。
- *203 「致陳源充郭嵩燾」（道光27年）『曾國藩全集』書信（一）42頁。梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』でも『曾國藩全集』でも、鄭敦謹の号は「小珊」（小山と同音）と表記されている。
- *204 曾國藩がこれを憎んでいたことについては、「京官」（20頁）を参照。
- *205 「復郭嵩燾」（咸豐4年正月20日）『曾國藩全集』書信（一）469-470頁。
- *206 「中堂が最初、命を受けて団〔練〕を運営するようになったとき、富裕な名士〔紳富〕たちから寄付を募った。陶の息子の少雲〔陶枕〕に錢1万緡を出させようとしたが、左が庇護して出させなかった。〔中堂は〕激怒した」（『能靜居日記』同治3年3月3日、趙烈文撰、廖承良標点整理『能靜居日記』岳麓書社、2013年、748頁）。
- *207 「復胡林翼」（咸豐3年正月）『曾國藩全集』書信（一）110-111頁。「まさにこの返信によって、胡林翼は曾國藩に思い至り、手紙を書いて救いを求めた」（張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第6章・吳久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）258頁）と吳久民氏は述べている。
- *208 「致勞崇光」（咸豐4年正月24日）『曾國藩全集』書信（一）479頁。
- *209 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2卷、91-92（一頁）。
- *210 「復駱秉章」（咸豐4年正月16日）『曾國藩全集』書信（一）458頁。
- *211 張宏傑・陳準等『曾國藩的友人与敵人』（第6章・吳久民「日月合璧輝青史－曾國藩与胡林翼」）258-259頁。
- *212 「留胡林翼黔勇会剿片」（咸豐4年2月15日）『曾國藩全集』奏稿（一）106頁。
- *213 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2卷、92-93（一-二頁）。胡林翼の才は自分の10倍、将来その力をかりて、賊を討つことができると上奏したという記述は、黎庶昌撰「曾國藩年譜」（卷3、36頁）にも見られる。「瀝陳撫臣勲績摺」はいまのところ特定できず未見である。
- *214 曾國藩は、咸豐4年4月10日の駱秉章への手紙で、「塔公〔塔齊布〕には実は計略はない。毎回伝令が隊を出るとき、某營が某路から進む、某營と某營が呼応〔接応〕する、某營が待ち伏せするなどとは言わない。命令を受けた者は、どうして良いかわからず、提督〔提軍〕のところ押し寄せて請訓するが、漠として〔茫〕答えない。ただ、各營は出撃し〔出隊幾成〕、前に向かって敵を殺せというだけである」、敗れたとき、「塔公はぼかんとして自分で考える〔自主〕ことができず憤って死にたがった」と述べて、羅沢南とともに一軍を率いさせ、胡林翼にはこれとは別に一軍を率いさせ、江北と江南、二つの陸兵が東に向かうことを奏請すると述べている（『致駱秉章』（咸豐4年4月初10日辰刻）『曾國藩全集』書信（一）489頁）。
- *215 『日誌』324頁。『職官』2158頁。
- *216 「胡林翼羅沢南隨同東征片」（咸豐4年閏7月初9日）『曾國藩全集』奏稿（一）193-194頁。
- *217 「附録廷寄 諭楊需塔齊布曾國藩速会協剿並指示胡林翼羅沢南夏廷樾行止」『曾國藩全集』奏稿（一）195頁。
- *218 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2卷、96-97（三-四）頁。
- *219 同日、漢陽も太平軍から奪還された。『日誌』345-346頁。
- *220 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2卷、97-98（四）頁。「調胡林翼來潯助剿片」（咸豐4年11月21日）『曾國藩全集』奏稿（一）353頁も参照。
- *221 梅英傑纂『胡文忠公（林翼）年譜』第2卷、98（四）頁。

The Legacy of Wu Wenrong: Zeng Guofan and Hu Linyi

Kaori Asanuma

In January 1854, during the battle against the Taiping Army, Wu Wenrong, the Governor General of Huguang (two provinces of Hubei and Hunan), fell victim to the wiles of the Manchu colleagues. Wu had planned a joint military operation with his two protégés, Zeng Guofan and Hu Linyi. Zeng had built a new fleet; however, it was not ready in time to rescue Wu, leading to his death. After enduring painful defeats in the naval battles of Yuezhou and Jinggang, Zeng finally recaptured the city of Wuchang from the Taiping army. Hu's father and Wu passed the bureaucratic final examination in the same year. Hu's father-in-law, Tao Shu, the Governor of Liangjiang (Jiangsu, Jiangxi and Anhui provinces), was renowned for his reforms in the salt administration and was deeply trusted by the emperor. Hu became a member of the Hanlin Academy but was later accused of mismanagement and subsequently demoted. After his father's death, he served as a local official. The seven years of hardship he endured in this role in Guizhou Province strengthened his abilities to work as a governor and commander. Hu led the militia and rushed to Hubei Province in response to Wu's summons. Upon hearing the news of Wu's death, Hu joined in the suppression of the Taiping Rebellion under Zeng's command.